

「笹川杯全国大学日本知識大会・作文コンクール 2015」日本招聘 訪日感想文



目次

★「日本知識大会」訪日団

1. 吉林大学 外国語学院 院長、訪日団長 周巽夫……………
2. 吉林大学 外国語学院 副院長 胡建軍……………
3. 武漢大学 日本語学科 大学院1年 梁丹璐……………
4. 武漢大学 日本語学科 4年生 李万琦……………
5. 武漢大学 日本語学科 4年生 盧可棟……………
6. 南京工業大学 外国語学院日本語学部 4年生 董露 ……………
7. 南京工業大学 外国語学院日本語学部 4年生 楊賽花……………
8. 南京工業大学 外国語学院日本語学部 4年生 向家瑤……………
9. 吉林大学 外国語学部 日本語学科 3年生 金亮……………
10. 吉林大学 外国語学部 日本語学科 3年生 張靖昆……………
11. 黃岡師範大学 外国語学院日本語科 4年生 歐陽雪振……………
12. 北京大學 日本語学科 大学院1年 台期霖……………
13. 黑龍江大学 東語学院日本語学科 大学院3年生 劉子越……………
14. 寧波大学 外国語学部日本語学科 4年生 徐燕斌……………
15. 海南大学 外国語学院日本語科 4年生 江婷婷……………
16. 海南大学 外国語学院日本語科 4年生 孫瀟瀟……………
17. 海南大学 旅游学院大学院 3年生 張津維……………
18. 東北電力大学 外国語学院日本語科 4年生 陳夢佳……………
19. 東北電力大学 外国語学院日本語科 4年生 金純燕……………
20. 東北電力大学 外国語学院日本語科 4年生 王卓……………
21. 西南民族大学 日本語学科 4年生 林依婷……………
22. 西南民族大学 日本語学科 4年生 袁通衢……………
23. 浙江越秀外国語学院 日本語科 4年生 楊莹……………
24. 浙江越秀外国語学院 日本語科 3年生 錢招裕……………
25. 浙江越秀外国語学院 日本語科 4年生 彭珍……………
26. 中南財經政法大學 4年生 吳萌……………
27. 中南財經政法大學 4年生 李夢丹……………
28. 中南財經政法大學 4年生 詹淼凡……………
29. 安徽師範大学 外国語学部日本語学科 3年生 張明睿 ……………
30. 安徽師範大学 外国語学部日本語学科 4年生 陳玉……………
31. 安徽師範大学 外国語学部日本語学科 4年生 王兆琪……………

★「作文コンクール」訪日団

1. 人民中国雜誌社 総編集長助理、訪日団長 薛建華……………
2. 南京郵電大学 日本語科 3年生王 喆琦玉……………
3. 合肥学院 日本語学科 3年生 奚相昀……………

★「笹川杯全国大学日本知識大会」訪日団

3. 武漢大学 日本語学科 大院生 1年 梁丹璐



知識大会で優勝してから、ずっと訪日のことを楽しみにしてきました。日本は初めてではありませんが、今回のツアーが一番印象深かったと思います。日本科学協会の皆様がいろいろ気遣ってくれて、おかげさまで、大変楽しくて有意義な八日間を過ごすことができました。感謝の気持ちがいっぱい、どこから言い始めたら良いのか迷いますが、この八日間に残ったいくつかのことを記録して、訪日団の皆さんと分かち合いたいと思います。

<富岳会 障害者施設>

障害者施設を見学したのは初めてでした。中国は近年老人ホームがたくさん作られてきたとよくテレビニュースで見かけますが、障害者のための施設はどんな様子なのかイメージにはありませんでした。富岳会で真面目にタオルを畳んだり、パンを焼いたり、太鼓を演奏したりする障害者たちの姿を見て、非常に感動しました。何よりも、働かせるだけでなく、障害者たちに夢を持たせることがすばらしかったと思います。職員さんの話によると、仕事を一生懸命頑張れば、資格を取ることもでき、正社員になることも可能だそうです。事前に配っていただいた資料によると、富岳会のような、障害者の自立生活のための就労・移動支援・生活支援など様々なサービスを提供する組織は全国で120箇所もあるらしいです。日本はまだ不況から脱出していないと言われているが、障害者福祉に対する支援がずっと進められてきました。先進的な技術、科学理論より、人々に対する思いやりの気持ち、支援活動こそ、私たちが日本から学ぶべきことではないかとその時強く感じました。

<針江 生水の郷>

関西に一年間ほど住んでいました。滋賀県にも二回行ったことがあります。針江のようなエコなところがあるとは知りませんでした。普通のツアーで絶対思いがけないところが見学できて、主催者の方々に心から感謝しています。自治委員会の皆さんのおかげで、このような究極的なエコの生活、美しい景色、地域の人のふれあいなどを求める人が見学に見えるようになりました。その中で、百年も続いた豆腐屋さんが私にとって一番印象深かったです。外見から見れば、ごく普通の一軒家でしたが、中に入ると、豆の香りがして、穏やかなおじさんと娘さん一家の姿が目に入りました。大量に生産して、お金を儲けるより、手作りを続け、自分の豆腐の好きな人だけに売ればいいとおじさんが教えてくれました。このささやかな夢を持っているおじさんも、美味しい豆腐が毎日食べられる地域の住民たちも幸せなのだと思いました。

<文学ツアー>

私は日本文学に興味を持っています。今回の訪日で静岡にある近代文学博物館を見学でき、とても嬉しく思っています。井上靖や川端康成についての紹介を読みながら、作家さちの創作心境を想像していました。『伊豆の踊り子』は六回も映画化され、どこまで愛されているのかよく分かりました。京都で金閣寺を見学する時も、三島由紀夫の同名小説を思い出しました。三島は放火事件を背景に、「美」に対する独自の理解を語ろうとしました。その美しい言葉と興味深い主題がずっと心に残っています。よく「文学は社会の鏡である」と言われているが、これからも文学作品をいっぱい読んでいき、過去、現代の日本をもっともっと知りたいと思っています。

訪日中、心に残った感動したことは数えられないほどありました。日本科学協会の顧先生、吉田さん、宮内さんがいつも親切に話しかけてくれたりして、外国にいるのに全く寂しさを感じませんでした。

団員の皆さんも心温かく、旅行中いつもみんなでわいわいしていました。一緒に参りました大学の後輩二人にも感謝の気持ちを表したいと思います。知識大会をきっかけに知り合いになりましたが、だんだん仲良くして、何でも話せる友達同志になってきました。これからも、訪日の感動を覚え、皆さんとの友情を大切にしながら、前へ進めたいと私は思っています。(原文日本語)

4 武漢大学 日本語学科 4年生 李万琦



5. 武漢大学 日本語学科 4年生 盧可棟



今度は今一度日本に行くことが出来て、感慨深いところがたくさんある。

まず、一つは静岡県の福祉施設である。以前は、知的障害者の生活はどんなものか、どうやって彼らの生活を支えることかは全然考えたこともなかった。たぶん彼らの生活に差し支えが出なければ良いのだから、ただ差し支えないことを保障するだけでなく、彼らの自己実現の環境を提供することこそが大切なことだと思うようになった。これが今度の旅から学んだことである。

そして、京都。去年半年に滞在したこの町に再び足を踏み入れることができ、まるで夢のようなことであった。到着後の夜、私は京都の町を歩きまわした。鴨川の沿いの風景は、まだ昔の名残りが残っているとしみじみ感じた。二日目の金閣寺も清水寺も、前には一度行ったことがあるが、今度はもう一度行き、改めて日本の伝統の美しさを切実に感じた。

以上は私の今度の日本行きの感想である。(原文日本語)

6 南京工業大学 外国語学院日本語学部 4年生 董露



この八日間、先生たちに色々とお世話になりまして、本当にありがとうございました。

中国では、「万巻の書を読むは万里の路を行くにしかず」ということわざがあります。今回の訪日研修を通して、この言葉をより深く認識しました。いろんなところへ見学に行くと、いろいろと勉強になりまして、すごく楽しかったです。一生忘れられない八日間を過ごしました。

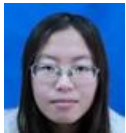
日本に行くのは初めて、だから私にとって、何もかも新発見です。印象深いこともたくさんあります。まずは、青い空、澄みきった湖水、きれいな街、ピカピカしている車、日本の綺麗さに感心しました。また、中国と違って、日本の道の両側はゴミ箱がほとんどなくて、ゴミが分別回収するという環境保護の手段にも深く打たされました。大都市に住む皆さんであろうと、小さな町に住む方々であろうと、みんな周りの環境の綺麗さを守るために頑張っています。最も感動したのは、やはり針江での見学です。「川端」を生かした針江の地元の方々は、ずっと「この水は自然の恵みだよ」と言いました。この水を誇りとして、一生懸命守る姿がいつまでも忘れられません。

または、「健心愛」を基にする富岳山の皆様も、深い印象が残されました。特に、あの太鼓の演奏会です。なんか聞いた後、涙が出てきたいそうで、感動してたまりません。やはり、時々、支障者にとっては、援助されるより、尊重されるのほうが貴重であるかもしれないと思います。

それから、日本人のマナーに何より感心しました。いつも笑顔して、親切で、丁寧な言葉で挨拶してくれて、中国人への差別はなく、日本人はすごく優しいです。でも、やはり一番深い印象が残されたのは運転手の方々です。シグナルがないの横断歩道の前でも、車とあった場合に、ほとんど人が先に通行するようです。そして、小さな町はともかく、最もにぎやかな東京の街までも汽笛を鳴らす場面もあまり見たことがないです。本当に感心しました。

とにかく、この八日間、日本のいろんなところへ行って、日本の文化や景色しみじみと感じて、本物の和食や温泉など、いろいろなことを体験できて、素晴らしい旅行だと思います。最後、皆さんと出会って、本当によかったです。また機会があれば、どこかで再会することを楽しみにしております。(原文日本語)

7. 南京工業大学 外国語学院日本語学部 4年生 楊賽花



中国にいて知ることができる日本は他の人から見聞きした日本ですが、日本の地に立てば自分が見聞きした日本を知ることができます。

日本科学協会と日本財団にご招待いただき、日本で7泊8日の友好訪問を行いました。期間中は日本側の心のもったおもてなしをいただきました。ガイドの方に案内されて霞のように美しい河津桜を鑑賞し、本場の日本料理を味わい、静寂の広がる源流の集落を訪ね、勇壮にそびえ立つ富士山を眺め……たくさんの美景を見たわけではありませんが、心から喜べました。最後には名残惜しい気持ちで7泊8日ずっと随行して下さった日本の皆さんに手を振りました。

今回の訪問で深く印象に残ったことはたくさんありますが、2つほど選んでお話ししたいと思います。

日本を旅していると、お手洗いの手すりからエレベーターのボタンに至るまで、障害者福祉の面でのさまざまな配慮を目にすることができました。中国のエレベーターにも障害者用のボタンが低い位置に設けられていますが、宿泊したホテルのエレベーターではボタンの上に視覚障害者用の点字も見られました。こうした気遣いがより適切だと思います。

3日目には静岡県御殿場市の富岳会へ行きました。富士山の麓に立てられた社会福祉施設群です。「健心愛」を目標に掲げるこの福祉施設は障害者を助け再就職の支援をすることに尽力してきました。スタッフの案内で富岳会の作業所を見学すると、そこにいたのはただ座って助けを待つ障害者ではなく、自分の手で自分の明日のために働く人々でした。

彼らが単純に福祉を受け他人から支援を受けているわけではなく、自分の手で努力して働き、普通の人と同じように自分のために努力して生活しているのだということが十分に感じられました。その後には太鼓の演奏を鑑賞したときも心が深く震撼し、感動のあまり涙が流れました。

他に印象深かったのは何と言っても立命館大学の国際平和ミュージアムです。同館の理念は、来館者が平和を創造し平和を守る責任を自覚し担えるようにというものです。見学の案内をしてくれたボランティアは白髪頭のおじいさんおばあさんばかりでした。正面口の彫像から館内に陳列されたさまざまな文献や現物資料まで、戦争がもたらした重苦しさや抑圧、そして人々の平和に対する期待と切望をととも感じました。

館内で最も印象深かったのは「いのちの画室」でした。室内に陳列されていたのは、戦争で亡くなった美術学生の美術作品です。本来なら画室でキャンパスに筆をふるっていたはずの若者たちが身内に、恋人に、夢に別れを告げ、行ったこともない場所でいくつもの殺戮を繰り広げたのです。気持ちが一瞬で沈みました。平和は全人類共有の貴重な財産です。私たちが今すべきことは平和を守り、平和を創造することであって、平和を踏みつけることではありません。

多くのものを見ることができ、今回の交流に感謝しています。私たちが今できることは中日の青年の友好的な交流の橋を架げるための一部となって、後の人がよりよくこの古くから密につながってきた両国を互いに理解できるようにすることです。

日本での7泊8日ですべてをうかがい知ることはできなかったかもしれませんが、自分の目で見て自分の耳で聞き、日本を知ることができました。(原文中国語)

8. 南京工業大学 外国語学院日本語学部 4年生 向家瑤

日本新発見



日本の地を踏んだのは2016年3月1日で3回目です。それまでは単純に遊びでしたが、今回は「日本新発見」という目的を持っていました。3回目の日本とは言え、期待と感動で胸がいっぱいでした。この国は訪れるたびサプライズがあり、驚きのたびに新発見があるので、新たな日本を発見するという目標は少しも難しいものとは思

えません。

初めての桜。日本で桜を見られることにはずっと期待していました。日本の桜は世界でも本当に有名なので、満開の桜を見ることなく日本を訪れたとは言えないでしょう。ソメイヨシノの盛りには半月ほどまだ早かったので少し残念に思っていました、思いがけず河津桜に出会えたのでした。静岡県の河津桜は2月中旬に満開を迎え、花期が1ヶ月続きます。ソメイヨシノほど有名ではないものの、ソメイヨシノより3週間も花期が長いので、より生命力が強い感じがします。河津町を歩くと、道路の両側、川の両岸で、満開の桜が並び、通行人がにぎやかで、お店が林立し、とてもにぎやかな光景でした。ずっと日本は静かな国だと思っていたので、桜の季節にはこんなににぎやかな場面が見られるとは思いませんでした。しかしこれほどにぎやかな光景でも、それだけではどこの国のどこの観光地でも見られることなので、日本新発見とは言えません。桜の道を足の向くまま歩いていて、まさに道を渡ろうとしていたとき、「車の通行中です。まだ横断しないでください」という親切な声がありました。現地ボランティアが交差点で交通誘導をしていたのです。簡素な指揮棒を持って道の両側に立ち、普段からしっかり訓練されている様子で誘導をしていました。「横断できます。車にお気をつけて」といったような声を聞いて笑顔で挨拶すると、もっときらきらとした笑顔を返してくれました。話によると河津桜が満開になる季節には毎年180万人以上の見物客が訪れるそうです。ほんの小さな街にそれだけの見物客が訪れても少しもごたごたせず、道路の横断さえ秩序が保たれているのですから、彼らボランティアの働きが大きいのでしょう。これで日本に対する認識がまた新しくなりました。これなら日本新発見と呼んでもいいでしょうか。内心ほっとして、河津桜がますます愛しく感じました。有名なソメイヨシノに少しも引けを取るものではありません。とうとう桜を見たいという夢が叶ったのです。

わずか8日間で日程がびっしりでしたが疲れは感じませんでした。私にとって毎日が新たな日本の待ち受けている日々だったからです。富士山、琵琶湖、金閣寺、清水寺などの観光名所、伊豆近代文学博物館、江戸東京博物館、衆議院など歴史や文化の基盤を見学するイベントがあり、それぞれの角度から日本に近づき日本を理解することができました。途中では多くの日本人との交流もありました。皆さんは日本へ歓迎する気持ちを見せてくれただけでなく、中国に帰っても今回の訪日の感想を伝え、中国の人にそれぞれの角度で日本を知ってほしいとも言われました。中日両国は昔から一衣帯水の隣人であり、コミュニケーションの橋さえ架かれれば互いを深く理解することはできます。そしてその橋を架けるのはまさに今の両国の青年、私たちの力なのです。(原文中国語)

9. 吉林大学 外国語学部 日本語学科 3年生 金亮



きれいな桜が満開で、まさかこんな美しい季節にこの美しい国、日本へ来られるとは思ってもみませんでした。

短くも充実して楽しい8日間を送れて、何もかも日本科学協会と日本財団のお招きとおもてなしに感謝です。たくさん新しい気づきがあり、思ったこともたくさんあります。

まず思ったことは、中国と日本では農村がかなり違うことです。自身が農村の出身なので長いこと

農村で暮らしてきたため、中国の農村はよく分かっているほうだと思います。どこの国であっても、農村の環境は都市部よりよいという共通認識があります。しかし日本の農村から受けた第一印象は、空気も通りもいっそうきれいだということです。その後で見た日本の温室はすべて鋼構造にビニールをかぶせる形で、地元の分厚い土壁にビニールをかぶせる形とは違っていました。立ち入ってイチゴを味わってみると、本当にこれまでで最高に甘いイチゴだと感じました。しかも洗わずそのまま食べられたのです。食べているとき思ったのは、両国の農民の意識の違いだろうなということです。中国では農民の大多数が農産物の生産量向上を主に考えているため大量の農薬や化学肥料を使っています。それで短期的な効果は出るかもしれませんが、長期的には土地が汚染されて痩せてしまい、結果的に大きな損失となることもあります。反対に日本の農民は生産量にこだわっていない感じがしました。量より質という印象で、いかに自然と調和してつきあい、本当の持続可能性を実現するかに気を遣っている人のほうが多いようです。量と質のどちらがより重要なのか、確かによく考える価値があります。

日本の桜は本当にきれいでした。日本語を学ぶ学生として、日本人が桜を好むということはかなり前から知っていましたが、当時は桜でなくともきれいなものは多いし誇張ではないかと思っていました。しかし実際に桜が満開の小道をそぞろ歩いてみて、確かに言葉で言い表せない美しさを体験できたのです。幾重ものピンクの花びら、心まで染み入る香りは本当に何もかも忘れ陶醉させてくれるものでした。別世界に足を踏み入れたかのように感じたのです。しかしこれほど美しい花も1週間ほどしか咲き続けられず、地面に落ちた花びらを目にすると確かに感慨が湧きます。かなり遠くまで歩いてとある角で立ち止まり、人生もこうだろうかと感じました。自分の時間を大切に、短い人生を彩り豊かにするべきだなと。

日本では社会福祉機関がとてもよくやっているのだなとも感じました。祖父母の兄弟の一人が実家の近所にある福祉施設に住んでおり、よく会いに行くので、中国のそうした施設はある程度知っています。中国の福祉施設には多くの身体障害者がおり、社会福祉事業には毎年大量の政府支出があります。しかし富岳会を見学して両国の社会福祉施設の違いをより深く学びました。富岳会では働いている人の多くが身体障害者で、日本の伝統文化である太鼓の伝承に従事している身体障害者さえたくさんいるのです。太鼓の演奏を鑑賞してからいくつか感慨が湧いてきました。中国の社会福祉施設でより重視されているのはお年寄りの暮らしやすさで、衣食住と移動などですが、しかし日本ではお年寄りや身体障害者が自らの生きる価値を見つけることに重点が置かれていると感じたのです。両者の目的はひとつで、身体障害者などの弱者層に幸せになる権利を持たせることですが、前者は外在的なレベル、後者は内在的なレベルをより重視しているというところが違います。

最後に、中日の友好は必然的なものだと感じました。今は政府レベルで両国の関係がやや硬直しているかもしれませんが、昔からいろいろな形で行われてきた民間の交流が一度も切れたことはなく、このところちょうど最も密接な時期に入ってきています。至る所で中国人の姿を見かけましたが、特に大阪城を観光していたとき強く感じました。そこでは販売スタッフと管理スタッフ以外のほとんどが中国人だったのです。またほぼこの化粧品店にも中国のスタッフか中国語のできるスタッフがおり、両国が互いにとても強く依存していると言えるでしょう。中国は日本の進んだ科学技術を離れられませんが、景気の低迷する日本は中国の巨大な消費市場と購買力を離れられませんが、両国が仲良くすれば共に利があり、しなければ共に損があるということは実際みんな分かっているのです。中日の友好は歴史の必然で、両国民の共通の願いでもあり、誰も歴史の罪人になってはいけません。

今回の日本の旅では細かい日中間の違いをたくさん見つけましたが、最も感じたことは自身にまだまだ不足があることです。今後はもっと勉学に励み、機会をつかんで本当の日本をもっとたくさん経験し、両国の代々の友好のためにすべき貢献をしたいと思います。(原文中国語)

10 吉林大学 外国語学部 日本語学科 3 年生 張靖昆



二度目の来日ですが、今度の八日間の訪日は初めてのことがやはり多くあります。露天風呂、富士見、花見、いちご狩り、琵琶湖、平和ミュージアムなど、初めてのことでありますし、人生の宝物にもなっています。

伊豆半島の一泊旅行は、私にとって一番わくわくしていた一日でした。大好きな『伊豆の踊り子』の原稿が見られましたし、まだ三月ですが、花見もできました。そして、温泉に入ることでもできて、露天風呂にもチャレンジしてみて、とても気持ちよかったです。だから、その一日中ずっと、「長年の念願が叶えた」「最高だ」というような気持を持っていました。

伊豆半島に対して、琵琶湖辺りの夕焼けは、一番落ち着いていた景色だと思います。ホテルに着いたら、ちょっと疲れていたが、すぐ出かけて琵琶湖のほうに向かいました。そして、琵琶湖の広さと静かさにびっくりさせられました。日本一の湖だと知っていますが、そんなに広いとは本当に思いませんでした。そして、夕焼けとともに、その景色が一生も忘れられない思い出になりました。

自然の美しさはもちろん、日本人の心も美しさも感じられました。特に富岳会の太鼓演奏を鑑賞した時、本当に涙が出てくるほど感動しました。身体障害をもっているのにもかかわらず、そんなに自信をもって幸せに生きるのが、誰でも感動するのでしょうか。そして、福祉活動に身を投げて、一生懸命に頑張っている人にも、心から尊敬しています。

身体障害者だけでなく、私たちの世話をずっとしてくれた日本科学協会のスタッフさんからも、日本人の心の美しさを感じられました。あまりにも疲れそうで、風邪にもなってしまう、いつも親切に学生の質問を聞いてくれた顧先生。八日間の計画を作って、いろいろな面白いアイデアを入れてくれた宮内さん。ホテルや食事処の予約をしてくれて、いつも日程のことについて詳しく説明してくれた吉田さん。そして、分かりやすく、細かいところまで紹介してくれたガイド星さん。ずっと安全に運転して、みんなの交通安全を守ってくれた運転手さん。また、行ったところのスタッフやガイドさんも、みんな優しくて、親切に私たちを招待してくれました。ここで、もう一度感謝の気持ちを表したいと思います。八日間、本当にありがとうございました。

今回の経験や出会いなどは、私にとって大きな収穫だとずっとそう信じています。これから、この宝物の思い出をもって、人生の道をもっと楽しく歩んでいきたいと思います。もちろん、中日交流についても、両国のコミュニケーションがもっとスムーズにできるように、私なりの努力をしていきたいと思います。(原文日本語)

11. 黄冈師範大学 外国語学院日本語科 4 年生 欧陽雪振



12. 北京大学 日本語学科 大学院 1 年 台期霖

すてきな風景すてきな日本——「笹川杯」訪日ツアーの記



日本へ行ってきました。

成田で飛行機を降りてバスで都内へ向かう間、目に入るものは高くもないビルとこぎれいな道路ばかりでした。中国で日本語を学ぶうちにイメージしてきた日本とは少し違います。自ら身をもって経験したのは思っていたよりもっと質素で厳かな姿でした。また退勤時刻の前だったせいで、それほど混雑していない交通状況を体験しました。黄昏時の道路が今も脳裏で連綿と続いているだけです。

北京にいたとき大変だったせいか、ホテルに着いたその晩から熱を出してしまいました。メンバーや先生達の談笑に囲まれ、胸が心配で高鳴っていましたが、後で吉田さんが振り返ったところ、そのときの私は落ち着いたまま医師に電話して診察を受けていたそうです。熱が下がってまともに考えられるようになってから改めて4日間の風邪を思い起こすと、自分でも意外なことに自分は幸運だと感じていました。

日本の医療機関を体験できたことは本当に素晴らしいと思います。周りの日本人が至れり尽くせりで世話を焼き続けてくれたことのほうが特筆に値するかもしれません。顧先生には感謝しています。毎日家から私の宿泊先へ足を運んでくださった先生には風邪をうつしてしまい、一行の帰国後も病院通いしていたそうです。そして風邪を引きながらもたくさん参考にするべき人生観を聞かせていただきました。石倉さんと中村常務も毎日わざわざ様子を窺いに訪ねてくださり、熱で朦朧とする私に付き添っていただきました。

5日目に熱が下がり、それまで4日間ホテルに籠もっていた私は中村常務の助けで新幹線に乗り、京都でみんなと合流しました。天気予報は雨でしたが、そう思いながら目にした東京の空はとても素朴でした。今こうして思い出すと、京都に到着して常務と寺院へ行った夜はかえって明るく、動静が互いに引き立て合う小道がみんなの心の小道へと通じていました。

その後は神戸へ行きました。当地は日本海と太平洋に通じています。神戸の空気は東京より落ち着いていましたが京都よりはだいにぎやかで、神戸という美しい町が醸し出す不思議な空気の一つでした。神戸の埠頭のそばでガイドさんと吉田さんにあれこれ質問しました。午後の熱い海風の中を出航するヨットとクルーザーを見ながら、日本のおだやかな海風を体感しました。

よく食べよく泊まりよく遊んだ8日間の旅が終わりに近づいた朝、バスでは昼夜の別なく働いてくれていた吉田さんと宮内さんが早くから準備をしてくれていました。みんなが互いに感激を述べ、わずか8日間ながら永遠に忘れない惜別の気持ちを伝え合いました。胸一杯の新鮮な気持ちで帰るとき浮かんだフレーズは、「感謝するわ。来てよかった。」(原文中国語)

13 黒龍江大学 東語学院日本語学科 大学院3年生 劉子越



去年の11月に笹川杯日本知識大会に参加して、運よく個人優勝賞をいただき、先日3月1日から3月8日までの8日間(実質6日)日本を訪問しました。

あれこれ感想を言う前に、まず参加するきっかけを話したいと思います。それが去年7月の時でした。日本で研修していた私に学校から劉さん11月の笹川杯日本知識大会に出られますかという誘いが来ました。とにかくはい、お願いしますと答えました。その後、調べてみますと、日本語学科の学部生が参加する大会だと知りました。あれ？日本語学科ではありませんが、学部生ではないぞ!!これどういうこと?ってどんどん謎が深まっていきました。国に帰って聞いたら、今回の団体戦は1チーム3人編成で、中に必ず男女少なくとも一人参加で、言語を勉強する学生に女性が多く、男性が少ないのでもし男性が集まらなければ、院生を最多一人入れてもいいというルールがありました。なるほど、それで私が加わったわけですね。こうして個人戦で賞を取って8日間日本を訪問することになったわけです。

今回日本に訪問する前に、どうせ、ガイドを連れて東京から京都までの定番コースだろうと思っていましたがアンケートを見ても、やっぱりかとも思いました。正式のスケジュールが来てみたら、え？富岳会？針江生水？どこ？って思いながら、ガイドも書いてありますし、やはり定番コースだというイメージが拭いきれませんでした。

いざ行ってみたら、コースこそ東京から京都までですが、その中身が全く違いました。2日目に桜が咲く頃ではないのに、河津桜という早咲きの桜を見せたり、温泉ホテルに朝起きてすぐ富士山が見える部屋を用意してくれたり、まさに至れり尽くせりでした。その時は、これが日本人の言う「お・も・て

・な・し」なのかなって思いました。3 日目国会議事堂に見学したときに、ガイドがついた良さがわかるようになりました。国会議事堂はほぼ全部国産の材料が使われていると、その中に 3 つが国産ではないものがある、それが、ステンドグラス、郵便ポスト、ドアノブと一人で見学したら絶対わからないもの。東京江戸博物館もそうでした。いままで拍子木が並行して四角い部分をたたくと思ってましたが、実際は丸い部分をクロスしてたたくものだと知りました。

4 日目に一つ目の謎—富岳会の正体がわかりました。それが障害者施設でした。障害者が働く作業現場を見て、ほかの障害者の面倒を見ながら、作業をやる光景を見て感動しました。さらにその前日に私たちが使っていたホテル時之栖のタオルも実はこの工場から作られたことを知った瞬間正直びっくりしました。工場を見学した後、富岳会名物太鼓ショーも見ました。障害者でありながら、あんなに上手に太鼓をたたいているのではないかと一芸に秀でるといのはまさしくこのことです。まさに太鼓職人です。さらにその一人一人の表情を見て、心底楽しんでその楽しさを見る人々に伝えようという意欲も感じました。家に帰って何回みてもそれが伝わってきます。本当にいいものを見させてもらいました。5 日目に 2 番目の謎—針江生水が解けました。針江は湧水が多い地帯で、その湧水が年中 13 度を保っていて冬には温かく、夏には冷たいのが特徴です。近くの住民が川端という井戸のようなものを利用して、洗濯用の水や飲み水を湧水から取って、落とされた汚れを鯉が食べて、鯉も肥えていれば、自然も汚れません！さらに木を焼いて炭にして壁に張ることで湿気を吸収するなど、いろんな工夫をしていました。昔から日本人が自然と親しんで暮らしてきたと聞いてはいますが、ここまで見事に自然と融合した暮らしを見て正直驚きを隠せませんでした。6 日目の金閣寺、清水寺、西陣織会館どれも素晴らしいところばかりではありますが、晩御飯の大阪グルメに驚きました。ソースの 2 度づけがダメ、どうしても足りない場合キャベツでよそって掛けるがマナーという串焼きの認識を徹底的に覆されました(実際に前回日本にいた時に居酒屋にそういう 2 度づけだめって札がありました)。セルフサービス形式になると、こうも変わってしまいますねと感じました。違う食べ方をしてもそれもまた一興というものです。7 日目に、訪日する前にぜひ般若心経を日本の寺院に寄贈したいと母に頼まれたのもそうですが、大阪の三大寺社の一つ太融寺にいきました。そこに行って感じたのは、国がいくら騒いでも、平和を願う心はどの国でも同じことだということです。

最後に、日本科学協会のみなさん、吉林大学のみなさんから頂いた訪日のチャンスで、日本のいろんな側面を体験し、まだまだ知らないことを知ることができて本当にありがとうございました。(原文日本語)

14. 寧波大学 外国語学部日本語学科 4 年生 徐燕斌



光陰矢のごとしとは言いますが、8 日間の日本の旅もあっという間でした。思い出してみると、心身で日本を感じるという夢のような旅がくれたものはすてきな旅行体験だけではありません。視野を広げ異国の文化を感じる旅でもあり、中日両国の開きについて深く考え学ぶ機会でもありました。

感じた日本の美

8 日間の旅程では日本の景色をいくつも観賞し、東京や大阪のように繁華な都市にも深入りました。日本が初めての私にとって、どこも興味深く新鮮で、そのうちこの地にある美しさに惚れ込んでしまいました。2 日目に訪れた伊豆の白浜海岸では、空と海の境界線を眺めていると海風が吹き、縁結びの神社の前で手を合わせたひととき、まるで自分がこの空と海に溶け込んだようで、見知らぬ土地ますます幸せを感じました。日本では風にも桜の香りが漂っていましたが、香りをたどって静岡県賀茂郡を訪れると、目に入ったのはピンク色の世界でした。満開の河津桜が静かに川岸に沿って綿々と遠くまで続いていたのです。桜の木の下を歩くと出店の呼び

声が聞こえ、盛んに行き来する人々のにぎやかな足音を聞き、初めて本当に桜の国の魅力を感じました。言葉にできない美しさなのですが、思わず「なんてきれいなもの！」と感嘆してしまいました。

3日目の朝、起床してカーテンを開けたそのとき、富士山全体が目に入りました。富士山の真っ白さが引き立っていて、一筋の日光が室内にこぼれるとまるで富士山の聖なる光に洗礼を受けているかのようでした。日本という国は毎日こうして富士山の洗礼を受けているからこれほど魅力的なのかもしれません。

4日目の夕方には日本最大の湖、琵琶湖の岸辺を訪れました。琵琶湖は近畿地方の人々を育む命の湖です。その岸部に立つと、この美しい湖が地域の人々に生命を与える源泉なのだと思えることができました。

よく文章やネット上で「本当の日本は京都にある」といった話を目にします。京都は日本人の精神のふるさとであり、日本文化の源であり、日本文化を象徴する土地です。夜の景色のもと京都の路地を歩いていると、ほの暗い照明の下、居酒屋一間一間で話に花が咲いている様子でした。昼間はリズムの早いビジネス環境のため、こうした場所でしか心身を解き放てないのでしょう。京都の路地を歩いていると、たびたび前方から和服姿の女子が出て行き、夜の景色のもと下駄のカランコロンという音が静かに響き京都の古典的な美しさを感じさせてくれました。金閣寺、清水寺は京都に歴史の神秘的なベールをかけているようでした。日本の美は京都で微に入り細をうがって表されていました。

身をもって知った日本の心

全日空機に乗ったときから日本のキャビンアテンダントの笑顔とサービス態度に心服しました。何度も微笑みながら必要なサービスを尋ねてくれて、答えるたびにお辞儀と笑顔でその場を終える姿こそ、日本到着前から日本に対して抱いた第一印象です。飛行機が成田空港へとゆっくり降下していくとき窓から藍色の空と汚れない地面が見え、この国に対するあこがれがますます強くなりました。荷物を受け取りにいくと、すべての荷物がすでにきちんと返却台のそばに並べられていました。これは中国国内でも香港でも経験したことがありません。こうした目に見えない日本の心は今の中国では不足しているサービス精神です。この一幕を目にして日本という国に感動し、中日両国の差はこうした細かいところから開いているのだと悟りました。

4日目には静岡県御殿場市の富岳会へ行きました。障害者のために設立された公益福祉法人です。理事長のお話を聞いてパン工房、生活用品工房などを見学しました。障害者の皆さんは体に不自由があるものの、普通の人と同じように仕事に従事しており、自分の人生の価値を生きているようでした。社会が彼らに与えるべき温かな愛と平等の権利です。富岳太鼓の演奏を鑑賞していたとき、力強く太鼓を鳴らす動き、氣勢が高い叫び声に、心から敬服し、また富岳会から彼らへの愛に感動しました。まさに同会の目的とする「健心愛」そのものです。彼らは健全に成長し、社会の関心のもと愛されていました。日本の福祉機関に感動すると同時に、私は去年7月に香港で新入生の精神リハビリテーション会を見学したことを思い出しました。先進国の成熟した福祉施設に感嘆し、また中国大陸はこうした面で不足と未熟があることも痛感しました。日本の経験を学んで、中国大陸の身体障害者にも自分の長所を発揮して自分の人生の価値を生きられるようにしてあげられたらと思います。

今回の旅で最も印象深かったのは何と言っても5日目に訪れた滋賀県高島市の「びわ湖源流の郷」です。当地のおばあさんがガイドを務め、この地方の自然が与えてくれた環境について紹介してくれました。澄みきって底の見える川の中を歩き来している鯉は掃除係なのだそうで、水草の青さも心にしみました。流れに沿って民家の前まで行き、ひとすくいの清らかな泉を汲んで、ぐっと飲み干すと、甘く心まで染み渡り後味が尽きませんでした。ガイドのおばあさんが水道

水と湧き水を比較させてくれたので飲んでみると、やはり自然がくれた水のほうがしっくり来ました。彼女の話によると、こうした場所は日本でも唯一無二の不可思議な存在なのだそうです。どうして当地を観光地として開発しないのかと質問が出ると、彼女は「観光地になるのは今でも考えていない。そのままにするのはいいです」と答えました。その言葉を聞いて心が癒やされたように温まり、日本人がこれほど自然と親しく、自然と調和しながら共存していること、自然を保護する理念が日本人の骨身にしみていることに思わず感嘆しました。自然を保護するという理念は、ほとんど汚れていない道路を見ただけでもうかがい知ることができます。よく考えると、道を歩いているときゴミ箱がなくとも面倒ではないのです。これほどきれいな地面を見たので私も汚すのが忍びなくなり、ごみをポケットにしまってホテルまで持ち帰りました。こうした精神は日本人ひとりひとりの体に隠れていますが、彼らの言動に表れることもあります。それが文化のソフトパワーであり、私たちが追求して努力していく方向でもあります。

関東から関西に向かう道中では日本独自の美しさを感じ、また感動も覚えました。道中で目にした景色、出会った人々は一生忘れられない思い出になったと思います。帰国する飛行機に乗るとき名残惜しくてたまりませんでした。心の底で「きっと中日友好のために自分の貢献をするぞ」と自分に言い聞かせました。

最後に、今回の得がたい訪日の機会をくださった日本科学協会の大島会長、日本財団の緒方理事長に心から感謝を申し上げます。道中ずっと面倒を見て心から交流してくださった顧先生、吉田さん、宮内さん、中村常務、ありがとうございました。ガイドの星さんと運転手さんもお疲れ様でした。ありがとうございました。(原文中国語)

15. 海南大学 外国語学院日本語科 4年生 江婷婷



8 日間の時間はとても短く、今でも日本にいるような感じがしますが、あの日々はあまりにもすばらしくて、まるで夢のようでした。日本から持ち帰ったものを見ないと、それが本当だったと意識することはできません。一生でもとても貴重な思い出になったと思います。

初めての日本は初めての出国でもあったため、少し興奮していましたが、もちろん不安もありました。日本へ向かう飛行機の中で、知らず知らずあれこれと思いをはせていました。日本は結局どういう国で、本で見たのとどう違うのか、待ちに待った日本の旅はどのような旅程になるのか。

飛行機を降りてホテルに向かうバスの車窓からは、本当にとっても清潔な国が見えました。道行く車はどれも新車のようで、ちりひとつ着いていないように感じ、地面にもごみがありませんでした。東京での歓迎会が終わったとき、すでに 9 時でした。体はとても疲れていましたが、日本の地を踏んだばかりでとても興奮していたので、それでも喜び勇んで仲間たちと夜の東京を経験しに行きました。夜の東京を歩いてみると静かに感じました。日本ではドライバーがクラクションを鳴らすことはほとんどないようです。数々の高層ビルから東京という街のにぎやかさを感じました。日本は国土が狭く、また東京は日本でも人口密度が最も高い地区のため、その夜のホテルは特に狭い部屋でした。部屋は狭いながら機能はそろっており、とても清潔できれいでした。シャワーを浴びてもユニットバスの鏡は曇りませんでした。また自動トイレの便利さを感じたのもこれが初めてです。

日本に着いた次の日は、長らく待ち望んでいた桜をついに見ることができました。何とも言いようのない美しさでした。特に桜が舞い落ちる瞬間は、まるで時間が止まったように感じました。その夜は静岡に泊まり、翌朝に起きると窓から美しい富士山が見えました。あの感動は本当に形容しがたいものです。滋賀県のホテルからは琵琶湖が見えました。日本科学協会の細かい手配のおかげでとても近くから日本の自然風景の美しさを楽しむことができ、とても感謝しています。

もちろん、日本に来た最も主要な任務はやはり見学による学習です。伊豆近代文学館、江戸東京博物館、富岳会、びわ湖源流の郷……日本の文学や文化などに関する知識がたくさん得られ、また教科書からは知りようのない知識がたくさんありました。特にびわ湖源流の郷を見学した印象が深く残っています。針江の人々は水を大自然の恵みとしてとても大切にしていました。皆さんのおもてなしにもとても感動しました。

日本で8日間過ごしてみて最も深く感じたのはやはり日本人の細かさ、秩序のよさ、思いやりなどです。参考にして学ぶべきところは確かにたくさんあります。たとえば日本では温泉に浸かる前にシャワーで体を洗いますが、目的は温泉水を汚さないためです。温泉に入ろうとしたとき髪をまとめるのを忘れていたら、温泉の管理員にすぐ注意してもらえたので、髪の毛を温泉に落とさないで済んだことを覚えています。また、日本でマスクをしている人が多いのは、大気汚染を心配しているからではなく、病気を他人にうつして迷惑をかけてしまわないためだそうです。こうした他人に配慮する精神は中国では多くの人に欠けています。

今回こうして日本を訪れ学習する貴重な機会が得られたことはとても幸いでした。美しき桜の王国にまた会えることを期待しています。(原文中国語)

16. 海南大学 外国語学院日本語科 4年生 孫瀟瀟



万巻の書を読むは万里の路を行くにしからず。日本語専攻なのですが、これまで日本へ行ったことはありませんでした。3月1日～8日、日本科学協会の主催で吉林大学の先生方に引率していただき、8日間の緩急ある日本ツアーが行われました。日本は立派で堂々としたビルがなく、複雑に緑化された景観もありますが、非常に清潔で快適です。この面積の小さい島国の経済、科学技術、サービス、エチケットなどは中国が参考にして学ぶべき価値がとてもあります。

日本に着いてすぐとても印象に残ったのは道路がとても清潔なことです。建築物はそれほど立派ではありませんでしたが、どこも清潔でさわやかでした。宿泊したホテルではカラスの鳴き声まで聞こえ、日本の環境保護がとてよくできているのだと分かりました。中国では不吉と思われるこの鳥が、日本では神聖な象徴として扱われているのです。

今回の旅行では幸いにも富士山のそばの有名な温泉ホテルを感じる事ができました。温かな量はきれいでも柔らかく、室内には机と小さな椅子が備え付けられ、ポットと日本茶が供されていました。日本の温泉は公共のものばかりで、客室内に個人用温泉はありません。日本で温泉に浸かるときは裸で、もちろん男女別です。温泉浴槽は多くありませんが、内湯と外湯に分かれています。洗い場には椅子と洗面器が備え付けられているので体などを洗いやすく、シャンプー、コンディショナー、洗顔フォーム、ボディソープもそろっていました。髪を乾かし身だしなみを整える化粧台にはドライヤー、コットン、綿棒、スキンケア用品などが備え付けられ、すべての台にスツールがありました。足の不自由な人に優しいだけでなく利用者全員が快適に利用できるものだと思います。

日本はとて清潔できれいだという印象を持ちました。8日間の旅行でゴミをひとつも見かけず、中国ならどこにでもあるインチキ商品のチラシもありませんでした。街にゴミ箱がなく、清掃員が常駐しているわけでもありません。日本の人はゴミを街なかで捨てずに持ち帰り、分別してからゴミ箱に入れ、戸口に出して回収を待つそうです。路上ではポンコツな車が見当たらず、乗用車、バス、トラックまでも、車はきれいに洗ってあるようでした。

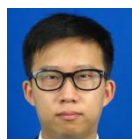
以前、中国国内で、多くの中国人が日本で買い物をしまくっているというニュースを見聞きました。日本で言う爆買いです。中でも人気なのが日本の便座と電子炊飯器と聞いて、当時はおかしいと思っていました。しかし日本で実際に体験してみると、日本のトイレは本当に使いやすいと言わざるを

得ません。日本のトイレはただ清潔だけでなく、便座が暖かくて気持ちよく、そばには水温、水勢調節、前、後ろなどの説明語句が書かれています。さらに音符の書かれたボタンもあり、押すと優雅な音楽や水の音が流れるのです。公共施設のトイレでは赤ちゃん連れへの対応を考慮して壁にベビーカーを設けてあるところもありました。中国の人が日本の便座を競って買うのは小さな事ではなく、一事が万事で、こうしたことから日本人がきわめてディテールを追求していることが分かり、恐るべき精密さ、使いやすさ、機能の自動化には舌を巻きます。

この 8 日間のうち、滋賀県高島市の針江地区にも行き、そこでは素朴な民間の風俗が感じられました。同地の水はとてもきれいでそのまま飲めるものです。人々は鯉をたくさん飼っており、大小の水路のあちこちで見かけました。この鯉たちは食用ではなく、水質浄化のために飼われているのだそうです。人と自然の調和したつきあいとはどういうものかをひしひしと感ずることができました。針江の水際にいると、大自然に帰るような感覚があります。周辺には日本式の小さな家が散在し、戸口には世帯主の名字が書かれていましたが、囲われた庭はありませんでした。現地の人々の開放的な心に驚くと同時に、日本社会の治安のよさに感慨を覚えました。

わずか 8 日間の旅行でしたが、本当の日本を感じられたと思います。帰国する飛行機でその数日に見聞きしたものを振り返ると、接触した日本人のまなざしからは友好、礼儀正しさ、平和と、日本人の勤勉さ、団結力、善良な理性を感じました。日本の社会福祉制度も比較的健全で、人々は自由、平等、幸福な生活を送っています。こうした社会は参考にして学ぶ価値があると思います。(原文中国語)

17. 海南大学 旅游学院大学院 3 年生 張津維(ジャン・ジンウェイ)



今回の訪日の旅において、日本の景色はともかく、中国様々な地方から集まる大学生・院生たちを観察することが出来ました。卒業生や三年生が多いこの団体では、日本の文字的な知識だけを拘らなく、日本という実在を謙遜な心構えで勉強し直し、皆さん全員新たな見解を生み出せることがあるのが一番印象的なものでした。

また、訪日団の皆さんは、定番の表側の秋葉原や清水寺などだけ見るのではなく、針江の生水のような、日本の裏——外国に踏み入れたくないところも真剣に体感してきた皆さんの姿から、今後どの職場についても、日本の表の知識や情報だけでなく、裏の未開発・未発見の我が国の進歩や、中日友好に対する有益な情報発信することが出来る小さな群像を見たのは実に感動しました。今後、皆さんはその活気のある探求心や、日本科学協会のおもてなしの精神をお忘れなく、それぞれ自分の歩むべき道を探ることができるでしょう。(原文日本語)

18. 東北電力大学 外国語学院日本語科 4 年生 陳夢佳



偶然に出会った優しさ

首を長くして待っていた 3 月の日本旅行の日がついにやってきました。メンバーは北京と上海の 2 空港から出発です。私たち上海チームはちょうど飛行機をおりたところで日本科学協会の顧先生と吉田さんに会えました。お二人はずっと微信(WeChat)のグループであれこれととても親切にしてくださっていた人たちです。北京チームの着陸を待つバスに乗り込み、8 日間の日本旅行が正式に始まりました。

無私の働きをしてくれた先生方と学友のみんな

この旅を充実させるため日本科学協会は本当に手間をかけてくれました。合理的にきっちりと手配された日々の旅程のおかげで心身とも喜びつつしっかり日本を楽しむことができました。初日に宿泊先に着いた時点でもう夕飯時になっていたのも、みんなは部屋で荷物を片付けてすぐ着替え、最

初の歓迎会に臨みました。会は 9 時近くに終わったので疲れていましたが、協会の吉田さんや担当の皆さんは労苦をものともせず、近くの神社と東京タワーの見学に案内してくれました。その後の何日かも早く起きて遅く帰る日程が続いて体の疲れを覚え、起床時刻の早さのような小さなことで愚痴もこぼれました。しかしある日、中国から引率で参加されていた周先生が思いやりを込めた言葉で「顧先生と助手の皆さんが我々より遅くまで寝ていたことがありましたか」と愚痴をたしなめてくださったのです。「よく見れば彼女たちがみんなマスクをしているのだから風邪だと分かるでしょう、その体調の悪い中なお我々に気を遣ってくれているのですよ」、と。その言葉がずっと頭を離れませんでした。そう、日本語を学ぶ私たちが一番よく触れる、日本人に敬服する振る舞いは他人に迷惑をかけることと思ひやりなのです。もちろん先生方だけでなく、複数の大学から集まった学生たちもよく助け合っており、男子が進んで女子のスーツケースを運ぶなどしていました。こうしたみんなの気持ちも忘れられないものです。

針江の「カバタ」の人道的配慮

人道的配慮という言葉にはどうしても大げさな感じがつきまといまいます。ふだんから使う言葉ではないからでしょうか。しかし針江の旅では確かに小さなところから真心、人道的配慮を感じたのです。滋賀県高島市の針江地区のエコな水利システム「カバタ」を見学できて幸いでした。案内してくれた現地ボランティアガイドのお話によると、小川の上流と下流の人が平等にきれいな水を使えるように、皆さんは自宅から出る水を汚さないようとても気をつけ、また普通の洗剤の代わりにエコ洗剤を使っているとのことでした。皆さんにとってはささやかなことなのでしょうが、私にとっては大きなヒントでした。各家庭で門前の雪をかくようなやりかたで調和を築くことはできないのです。調和ある社会には助け合いが必要で、他人を思いやる心が必要です。私の祖国でも経済が急速に発展するのと同時に人々の精神世界もより美しいものになってほしいと思います。

通行人を急かすクラクションのなさ

最終日は大阪での自由行動でした。数人ずつ集まって、繁華な道頓堀を歩いてきました。私のグループ 4 人は、にぎやかな商店街に目を奪われながら歩いているうち、知らず知らずに細い道を塞いでしまっていました。ふと振り返って驚いたことに、車の列が私たちの後に徐行しながら続いていたのです。4 人が反応すると頭を下げて謝り、道を空けてほしいと……。その後にグループの中の一人が考えごとでもあるように、クラクションを鳴らさないなんて日本人は本当に人ができていると感嘆しました。日本は小さな島国ですが、敬服して学ぶべきところはたくさんあります。

8 日間はあっという間に過ぎてしまいました。その間にちゃんこ鍋や、人がひしめき合う不思議な居酒屋を体験しました。ほとんどゴミ箱がないのに清潔な日本の大通りには驚きました。先生方の無私な働きに感動もして、忘れられない友情を結ぶこともできました。人生の中のとても貴重なページになったと思います。(原文中国語)

19 東北電力大学 外国語学院日本語科 4 年生 金純燕



夢現のような八日間がまさか三日間も過ぎていたとは、日本で見たこと感じたこと今でも鮮やかに目の前に浮かんできます。

小さい頃から日本に行くことが夢だったので日本に到着した飛行機を降りて初めて日本に足を踏んだとき泣きそうになりました。「これが日本かっ！」という恥ずかしい発言も何度もしました。

日本に着いたその夜ただただ興奮とワクワク感しか思え出せませんが、確か友達と意地を持って宮内さんチームに参加しないで初めての冒険をしました。危うい迷子になりかねないとき金色でとてもキレイな東京タワーが現れて私たちを救いました。その向こうの細い道を歩いたらホテルに帰れま

した。東京タワーが神様の力なんやら持っているのではないかって到着一日私の中二病満開でした。

二日目伊豆で初めていちご狩りをしていちごを食べて昭和の森会館でわさびアイスを食べ海沿いの高級レストランで昼ご飯を食べ、ほとんど食べまくりの一日でした。河津に着いた時まだ緑が混ざっている桜を見てから 아이폰のシャッターを押さないときはありませんでした。帰国して携帯のカメラロールを見ると桜の写真が半分占めました。これぐらい桜は衝撃的にキレイでした。足湯をしました。まさかの無料だったことにまだ驚きました。足湯しながら向こうの桜並木を見て日本人がそれほど花見が好きなのは理解できなくはないです。

夜泊まったホテルは温泉が付いてると聞き早速着慣れない浴衣を着て温泉に向かいましたが、入ったらまずローカー探しも苦労して、タオルを持って入っていいのか悪いのか温泉の入り口の前でうろうろしてもものすごく不審者みたいだったのですが、シャワーの手前の出口に温泉から上がっていた中年の日本人が私たちと目合ってた入り口に入って私たちに何か困っていますって聞いてきて、シャワーから温泉の入る方、上がって外にマッサージ機の使用方まで親切に教えていただいて心が暖かかったです。

三日目この旅の個人的の大目当てとなる秋葉原の日！アニメイトやとらのあななどなん店舗も買い物したのですが、店員さんみんなニコニコな笑顔で道案内など頂き、お会計の時まだ日本の 5 円や 10 円 50 円 100 円のコインに慣れない私はお金の計算遅くて申し訳ないと思っていた時店員さんが大丈夫ですよゆっくりどうぞって言われて本当に日本人ってとこまで親切なんだろうと思いました。

富岳会に伺った日、体不自由の方々が目の前で太鼓のパフォーマンスをされていて、幸運なことで私は一番前の席に座って感じました。音楽の影響で泣けることはあの日に会うまで信じませんでした。私はそう簡単に泣ける人ではなかったはずなのに涙が止まらないぐらい泣きました。世界でも輝いている太鼓チームの方々といい工場働いてる方々といい、皆さんは立派です、私たちとなの違いもない根強い方々です。尊敬する存在です。富岳会の皆さんを見習ってこれからの就職活動も頑張っていける気がします。

実は最初の日にガイドさんが日本人の心遣いはすごいとおっしゃいましたが、それでも日本のホテルのバスルームの鏡を見たとき驚きました。シャワーの後曇るはずだった鏡は真ん中だけ曇らなくてなんという気遣いだろうと感心しました。レストランのお手洗いの洗面台水一滴もなくキレイなのも印象深かったです。日本とこのトイレの便座が暖かいのも驚きました。どうも中国人がわざわざ便座買いに日本に行くことが理解できました。

地震が故に日本の建物ほとんど低めなのもわかっていたつもりですが実物見ると本当に低くて、私のイメージの日本は発展国でもものすごい高い高級ビルがそびえてそうだったのですが逆にかわいいイメージに変えました。だとい田舎でも看板に必ずかわいい絵を書いてあって商品のパッケージもかわいい富士山などになっていて本当に日本人は天才だなと思いました。

私の父が以前日本を愛しすぎる私に言いました理想は高すぎて実物の日本を見たらがっかりするかも知れないと、でも実際に見た日本にもっとベタ惚れになりました、いつか自分の力で日本に行きます。必ず。

この旅に苦労した日本財団の皆さん日本科学協会の皆さんお疲れ様でした、どうもありがとうございました。またいつかお会いにできるように頑張ります。(原文日本語)

20. 東北電力大学 外国語学院日本語科 4年生 王卓



気づいたら日本を離れてもう二日間が経ちました。短いようで長い八日間を振り返ってみると本当に素晴らしい時間を過ごしました。高校時代から日本の文化作

品と接触し、大学で日本語専攻を選び、日本に行くことはずっと私の夢でした。この度、笹川杯全国大学日本知識大会・作文コンクール訪日団の一人の団員として、皆様と一緒に楽しい時間を過ごせることを心より深くお礼申し上げます。

北京で全日空の飛行機を乗って成田に向かう時、すでに日本の息吹を切実に感じました。特色のある機内食、親切さが溢れているスタッフたちのおかげで、初めて飛行機に乗る私も緊張が解けて、外の景色を楽しめることができました。

飛行機が着陸し、外へ出たとき、真っ先に目にしたのは一点の曇りもない青空でした。新鮮な空気、秩序のある人々、綺麗な街、まるで以前から見てきた日本のドラマのシーンが現実に入り込んだような感じで、ああ、これが日本！と感心しました。

東京、静岡、滋賀、京都、大阪、色んなところを見て回って、都市、農村、政治、飲食、福祉、この八日間様々な方面で日本という国を知ることができました。その中で、一番印象が深いのは立命館大学国際平和ミュージアムを参観したことです。人類の歴史は戦争で血まみれだったが、戦争だけをなくしても平和だと言えますか。今でも、世界中大勢の人々が苦しんでいる、綺麗な水が飲めない、食べ物の保障がない、学校を通うことができない、皆さんが幸せになれることこそが平和だとボランティアガイドさんに教えていただきました。戦争中、日本軍隊が犯した罪、近隣諸国の被害は事実に基づいて展示され、過去のことを忘れてはいけない、明日の平和を築くためだとガイドさんがおっしゃいました。戦争の残酷さを痛感して、皆さんが平和の尊いさをより一層感じて、世界各国の人々が共に努力し、平和の世界が作れることを心から祈っておりました。

時間はあっという間に過ぎてしまっていて、とうとう別れの時が来てしまいました。バラバラになっても、中日友好という信念を持つ仲間として、いつか必ず会えるでしょう。

最後に、日本科学協会、日本財団、吉林大学の方々にこんな素晴らしい機会を与えたことを心から深くお礼申し上げます。(原文日本語)

21. 西南民族大学 日本語学科 4年生 林依婷

すみれの花咲く頃



すみれの花咲く頃に私はやっと日本に来た。このチャンスを私に与えて本当にありがとう。日本は私の長い間の夢の場所である。今回この素晴らしい時期で行かれることは本当に嬉しい。自分の目で日本をしみじみ感じることは本当に幸せである。この八日間で私たちは東京、大阪、京都だけではなく、静岡、滋賀まで行った。定番の場所だけではなく、富岳会や針江などの田舎のような場所も行った。なんと幸せだろう。これで、いろんな面で日本を感じられる。

最初の日成田空港につき、高速道路で東京に移動する途中車が少なく、とても静かで、道路の両側はそこに住む人を迷惑をかけないように防音壁をたて、本当に日本らしい。日本にいる実感があるのはスカイツリーや東京タワーを見たとき、心がワクワク、ドキドキであった。歓迎会のあと、同行と一緒に秋葉原を行った。実の目的は山手線に乗りたいことである。日本の切符は本当に簡単で、小さくである。秋葉原につくと、日本にいる実感がしみじみ感じた。さすがにお宅の聖地だ。また、東京にいる外国人が本当に多い。街で歩いていると、日本語、北京語、カントン語、英語、またタイの言葉も混じっている。本当に不思議と思う。

二日、私たちは静岡に向かった。富士山は本当に綺麗だ。こんなに美しい富士山を見た私たちは本当にラッキーだった。あの日の活動が多くで、印象的なのは日本の田舎は本当にきれい。山道が危ないが、運転手さんがすごい腕を持てる。昭和の森会館も見学した。伊豆の踊り子の映画は6本で知らなかった。条件があれば、きっと全部味わる。そして、井上靖の家が本当に綺麗で、羨ましい。また、天城越えという演歌ここを歌うことは初耳だ。言いたいことがたくさんあるが、やはり温泉が最

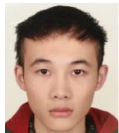
高だ。温泉も初めてなので、だから最初はとても緊張して、どうやるか全然分からない。でも、最後は気楽に温泉を味わった。

今回の日程が多いので、一々書くのは無理なことで、だからなるべく自分の言いたいことを書く予定である。私たちは衆議院見学をした。外国人として、国会議事堂を見学することはとても不思議なことである。また、日本の小学生の後ろについて、彼らの真剣の様子を見ると、私は感心した。東京博物館で一番印象的なことは歌舞伎の演出用の音を生で感じた。もともと伝統の芸能に憧れがあって、今回ガイドさんのおかげで、こんなきれいな音を聞けるのは幸せである。伝統芸能というと、**今回も富岳会の太鼓も見た。本当に感動した。私たちのために、こんなに力あって、素晴らしい公演をして、本当に感動した。日本の社会福祉法人富岳会を見て、私は感心と同時に、私たちの国どうやって障害者にとっていいだろうと考えた。やはり、私たちはいろんなことを勉強する必要があるんだ。**

針江生水の郷も見た。富岳会や**針江**などの田舎のような場所も行った。なんと幸せだろう。これで、いろんな面で日本を感じられる、招待された魚と大豆もとてもおいしい。なんかいっぱいなことをもらって、返すことがなくて本当にごめんなさい。そして、おいしい水、魚と大豆ありがとう。食べ物というと、この一週間の食事は本当に最高である。本当の和食は食べたことがないので、今回はいっぱい味わった。刺身は美味しくて、漬物とご飯はぴったり。しゃぶしゃぶの牛肉もうまかった。先生の用意を心から感謝する。

最後は、大阪の一日の自由活動をありがとう。この日を利用して、阪急電車に乗って、すみれの花の咲く頃に私が好きな宝塚大劇場を見に行き、観劇をした。でも、歓送会に遅れて本当にごめんなさい。たくさんの方々のおかげで、迷子にならず無事で場所を見つけたことは何よりである。本の中の日本、本の中で書いていない日本をこんなにはしみじみ感じた。先生方は私たちのために作り上げた日程をありがとう。これは私の一生の思い出で、大切な宝物である。皆との絆は一生忘れられない。(原文日本語)

22.西南民族大学 日本語学科 4年生 袁通衢



中国古代の思想家である孔子は「友あり遠方より来たり、また楽しからずや」という言葉話を話しました。今回の訪日研修では、まさにこの言葉のように、日本の方々から私たちを友達として素晴らしいおもてなしをいただき、楽しい八日間を過ごしました。日本財団及び日本科学協会からお招きをいただき日本に来られて本当にありがとうございました。

た。

実は、ちょうど一年前だった時、私は初めてこの憧れの国——日本に行ったことがあります。その時、早稲田大学で一ヶ月間ほどの日本語授業を受け、真の日本に触れ始めました。そして、今回のように私たちに日本社会のあまり触れないところを体験させて、より日本の色々が理解できるようになる気がします。

例えば、今まで未体験する社会福祉施設「富岳会」の見学では、施設のスタッフ達が身体障害や精神障害の方々と一緒に生活できるよう大変努力している姿を見ました。その障害者たちのため、様々な公益施設を建てたり、仕事のやり方を教えてあげたりするような支援を行っています。もちろん、中国では社会福祉施設があると思いますが、このような生涯的支援は実に少ないでしょう。障害者たちの頑張り姿を見ながら、将来彼らが一般人のように社会に進出する晴れ姿が想像できます。

さらに、滋賀県にある**針江**生水の郷の皆さんは「川端」という仕組みを利用して地元の良い影響を与えました。ご当地のボランティア案内係の説明によると、この地域の水は200年前ほどの地下からの湧水なので、みんな非常に大切に使用してきれいにするように守り続けています。それぞれの家で「川端」があり、一環の端池に鯉が泳いでいる風景に驚きました。自然と人との調和はま

さにこの世に一番大切なことではないでしょうか。もし中国でもこのようなシステムが開発できたら自然環境にどれだけの良さに及ぼすでしょう。

今回の研修訪問を通して、心の奥に感動したことがまだまだたくさんあります。日本各地を回りながら、全国各大学からの日本語学習者たちや日本人の中国語学習者たちと出会ってみんないい友達になって本当に有り難く思います。さらに、日本科学協会の皆さんがずっと私たちに付き添ってくれて、風邪を引いたり、寝不足したりするのに極めて感激しました。これから今回で得たものを自分なりに生かして、皆さんと一緒に手をつなぎ中日友好の架け橋を築いていこう頑張りたいと思っています。(原文日本語)

23. 浙江越秀外国語学院 日本語科 4年生 楊莹



今回の旅行から戻って以来、先生方に「日本はどうでしたか」と聞かれるたび、「たくさん勉強できました」と答えています。決して誇張ではありません。本当に今回の旅行で勉強できたことは多く、収穫もたくさんありました。深く印象に残ったことはたくさんあります。たとえば琵琶湖の美しい眺めです。

初めて見る琵琶湖に思わず西湖を思い出しましたが、琵琶湖の方が静かで、西湖に比べてもさらに広々としていました。にぎやかな人の往来はなく、あるのは湖と一抹の真っ赤な夕日だけで、遠くは霧の向こうに山々が見え隠れし、近くは何組かの話しながら散歩する人が見えました。これほどまで静かに自然の美景を楽しめるのはとても得がたい機会です、みんなはこのすばらしいひとときをカメラに納めていました。

針江を訪れたのも貴重な経験です。こんなに甘い水を飲んだのは初めてで、「川端」という新しい言葉も学びました。針江というこの小さな集落は、人と自然の調和という言葉完璧に説明していると思います。当地の親切なガイドの方と一周すると、各家庭の「川端」には主人の思いが込められているようで、花が植えられ魚が飼われていました。藍色の空の下、一年中13度の川水が地区全体を流れて、水中の「バイカモ」は軽やかな青緑でした。高層ビルの林立する東京と比べると、ここはもう一つの日本です。

かの有名な金閣寺では本に載っていた「枯山水」を目にしました。小石が山並み、白砂が湖や海の象徴に使われ、線で水の紋様が表されており、さながら余白の残る山水の絵巻でした。また「清水の舞台から飛びおりる」と言われる舞台も見ました。清水寺の裏手には地主神社と呼ばれる小さな神社がありました。神社と寺院は元来お互いに関係しない2つの宗教の礼拝場所です、それが一緒にあるのは日本ならではの景観かもしれません。清水寺は桜の名所でもありますが、今回は清水寺の桜の見頃には当たりませんでした。しかし満開の河津桜を見ることができたので本当に幸運だと思います。川岸に沿って桜が続いており、訪れたその日は天気もよく暖かい日でした。新しい友達数人とおしゃべりしながら桜の咲く路を散歩していると、ときどき何枚か花びらが舞い落ちてきて、道ばたの屋台から呼び声が聞こえ、日本の春景色をしっかりと経験できました。禅寺、神社、富士山、温泉、桜、枯山水……本の中では何度も見たものばかりですが、今回の旅行を経験して、よく知っている名詞などというものではなく、すばらしい記憶になりました。日本文化がより興味深いものになったと思います。

この8日間、たびたび日本の小学生を見かけました。江戸東京博物館で真剣にノートを取る姿、ホテルのチェックアウトのとき整列してフロントにお礼のお辞儀をする姿。そして道を聞くと自分から目的地へと案内してくれたのでした。謙虚で礼儀正しく、人当たりが親切で、感謝の分かる子たちでした。彼らのひとつひとつの言動は日本文化が反映されたものです。

日本科学協会の手配してくださったイベントにとっても感謝しています。私にとってはどの活動も新たな体験で、新しい発見がありました。「笹川杯」日本知識クイズ大会を開いてくださった日

本科学協会にも非常に感謝しております。この大会のおかげで中国各地の優秀な先輩たちと知り合うことができ、この 8 日間とてもお世話になりました。お互いに交流する中で日本語の学習に関する知識を学ぶこともできました。一行はとても打ち解けて大家族のようになり、帰ってきてからも写真を見るといまだにみんながとても恋しくなります。また会えるご縁があることを願っています。最後に、顧先生、吉田さん、宮内さん、大変おつかれさまでした。(原文中国語)

24. 浙江越秀外国語学院 日本語科 3 年生 錢招裕



日本で充実して楽しい 8 日を過ごしたこの旅行では、たくさんの楽しい事を経験して、たくさんの美しい景色を鑑賞し、たくさんのいい人と知り合い、たくさんの未知なる日本を目にすることができました。書物の中で学んだ日本は書物の中の日本に過ぎません。まったく動きがなく生気がないものです。今回の旅では日本で本当の生きた日本を目にすることができ、海を挟んで向かい合うこの国に対する認識をより深めることができました。

ある国の本質を知るには、国の一番基本的で細かいところから着手しなければなりません。あらゆる細かいことがらの中で最も印象深かった、そしてなじめなかったことは、道路の横断です。

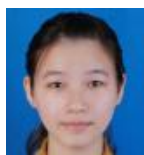
郷里では交通状況もドライバーの運転習慣も安心できるものではないため、道路を横断するときはいつも辺りに注意を払っています。日本での状況は少し違うようで、歩行者信号や横断歩道がないところでも、歩行者と車が遭遇するとドライバーは車を止め、歩行者が横断し終わるのを静かに待ってから通行していました。生まれた頃から道路も自動車も恐れてきた自分のような人間にとっては間違いなく特殊な待遇です。こうした変化から、私たちは隣の国から学んで変わる必要のある点がある点と確かに感じました。

このほか、旅の途中で起こったある出来事にも深く感銘を受けています。

4 日目にバスで東京から滋賀に向かう途中、あるトンネルを通りました。短いながら幅が狭いため 2 台しか同時に通れないトンネルでした。バスがトンネルの中ほどまでさしかかったとき、トンネルの向こう側に別の大型バスが現れました。2 台のバスはトンネル内でしばらく対峙していましたが、トンネルがもう少し広くならないのはどうしてだと私たちが文句を言い出したとき、運転手さんはバックを始めたのです。トンネルを出ると対向のバスがこちらへやってきて、すれ違いざまにそちらの運転手さんが軽く 2 回クラクションを鳴らしてよこしました。お礼を言っていたようです。もしかすると相手は特別な形で感謝を表現していたのかもしれませんが。トンネルを抜けるとかなり渋滞が続いていましたが、路側帯から追い抜きを欠ける車もクラクションで催促する車もいませんでした。これこそ日本の最も賞賛できる点だと思います。

8 日間という時間はあっという間で、短いと言えば短い、長いと言えば長いものでした。日本では「一期一会」が重んじられていますが、中国でも「君に勧む更に尽くせ一杯の酒、西のかた陽関を出ずれば故人無からん」とはよく言われています。日本で出会い、忘れられない時間を過ごすことができたことは確かにすごい縁です。今しばらくは分かれ、各自の元いた土地に戻っていますが、きっと私たちはどこかで国をよりよくするため、中日関係をより緊密にするため黙々と努力をしていくことでしょう。(原文中国語)

25. 浙江越秀外国語学院 日本語科 4年生 彭珍



にぎやかな別れの声の中、8日間の訪日旅行が終わりました。初めての出国で、ずっとあこがれていた国でもあり、とても緊張し興奮しました。

出国の前に引率の先生から、自分たちは中国の大学生だけでなく今の中国人の代表でもあるので、国のイメージを損ねることのないようにと訓戒がありました。

当初きちんとできるか心配でしたが、日本に訪れてから、規則制度を守ることはとても自然なことなのだ気づきました。誰もがきちんとごみを分別し、エスカレーターに並び、左側通行や右側通行を守っていたからです。生活リズムが早く急ぎ足ではあるものの、きちんと秩序がありました。

静岡県伊豆市では、川端康成とその作品『伊豆の踊り子』をより深く理解しました。静岡県のホテルでは窓を開けるだけで富士山が見え、一番のサプライズだと思いました。学生の部屋がどこもきちんとしており、きっとたくさんの努力がなされているのだと思い特に感動しました。同時に初めての温泉も体験しました。温泉に入ったのはこれが生まれて初めてです。日本の温泉は露天、内湯、薬湯などに分かれており、一番大事なものは服を着てはいけないことですが、周りが全員女性とは言え恥ずかしいものでした。

当初、日本の桜は3月末に咲くので鑑賞はできないという心の準備をしてありましたが、思いがけず見られて驚きました。静岡県で河津桜を鑑賞できたのです。空いっぱいの花吹雪はありませんでしたが、とても風情がありました。ちょうど下校中の中学生を見かけ、アニメの中で暮らしているような既視感を覚えました。

一番脳裏に焼き付いているのは、静岡県裾野市の富岳会を見学したことです。体に不自由はあっても自分の努力で社会に貢献ができるのですね。特に太鼓の演奏では、心を打つ太鼓と演奏者の叫びに共鳴し感動しました。胸腔全体が震え、感動でいっぱいになるのを感じました。

滋賀県でも独特な発見がありました。針江地区の生水は地中で百年以上も過ごした雪解け水で、冬は暖かく夏は冷たく、当地の人々は天からの恵みとして扱ってきました。そのため水を金儲けの道具にすることもなく、ツアーの開発も考えていないそうです。1日あたりの見学者数は一定とのことでした。おそらくあまり多くの方が立ち入ると本来の水質環境が壊れるからでしょう。

京都はずっと夢にまで見てきた場所で、そこではどんなことにも引きつけられる感じがしました。京都では立命館大学、同志社大学の学生と交流し、一緒に国際平和ミュージアムを見学しました。第二次世界大戦、中日戦争に関する記念館を見学したのは2回目です。最初は南京大虐殺記念館でした。中国人の日本人に対する印象はおそらく彼らが歪曲した歴史書にとどまっていますが、しかし実はそれも小さな一部に過ぎません。国際平和ミュージアムのように第二次世界大戦の真実を、中国の人々の苦痛を、日本本国の人の戦争に対する思いを記録した記念館もあるので、一部を全部と見なしてはいけません。周恩来総理が言ったように、歴史を忘れることはできませんが、さらに未来を展望すべきなのです。日本には確かに学ぶべきところがあるのを否定できません。私たちがギャップを解消して、国民と国民、国と国が友好的につきあえるようにしたいと願っています。よりすばらしい中日関係を創造しましょう。(原文中国語)

26. 中南財經政法大学 4年生 吳萌



この度は日本財団並びに日本科学協会にお招きいただき、誠にありがとうございました。私にとって日本が初めてで、この目にする全てが新鮮に思えます。

初日飛行機に乗り、日本に向かっていくと、窓越しに空がだんだん青くなっていくのが見えました。夜に歓迎会が開かれ、その後東京タワーまで散策しました。二

日目のいちご狩りも実をいうと初めてですし、また博物館を見学し、白浜海岸を散策しました。なぜ

か同校の二人はそれぞれの恋人を思っているようですが... 東京タワーに登るときも、周りのカップルを眺めながら考えていましたけれど、人間という生き物はどうして壮大な景色を見て恋愛感情が沸くのでしょうか。不思議です。花見や河津七滝を回った後、和風のホテルに泊まり、思う存分温泉に浸っていました。衆議院見学では、同じ見学に来た小学生や年配の方とちょうど一緒でしたので、やはり人はいくつになっても勉強し続けなければいけないなあと思われました。ほかにも、**富岳会で見学するとき、障害者の方が一生懸命に仕事をしている姿や、太鼓を叩いている時の笑顔を見て癒された気がしましたし、これからも頑張れる元気をもらいました。**五日に特に印象深かったのは針江での見学です。本当に綺麗で美味しいお水で、持ち帰りたくらいです。こんな素晴らしい環境を守ってきた地元の委員会・ボランティアの方のお話を聞き、感銘を受けました。一方、環境を守り続ける上、委員会の運営や存続のこともあり、この数日間ガイドをしてくださった年配の方を思うと、やはりみんなは少子高齢化に悩まされていると実感しました。六日は立命館大学国際平和ミュージアムでの見学が一番印象に残っています。ガイドをしてくださったおばあさんから、「人はもともと一つだし、国や出身とやらで争っている場合じゃない」という言葉をいただきました。この言葉を、私は一生忘れないでしょう。さらに京都では金閣寺と清水寺をまわり、大阪では自由行動で北野天満宮に行き、本当に語りきれない、充実な八日間を過ごしました。

正直、初日の朝、ホテルに向かうバスに乗り、さっそく資料を配られたとき、ぎっしりしたスケジュールを見ると、少し心配もしましたがけれど、いざ最後になると、八日間はまるで夢の中でした。自分の目で日本という国を見る機会を得、至れり尽くせりのおもてなしを受け、本当に感激に耐えないのです。(原文日本語)

27..中南財經政法大学 4年生 李夢丹

感動と成長—訪日の随想—



日本は2度目ですが、日本は本当に魅力的な国で、最初に行ったときに惚れ込み、今回はじっくりと味わってきました。十分な時間があつたなら、ゆっくり歩いてゆっくり味わいたかったと思っています。

初めての日本では成田空港の通路に和風の香りを感じました。空港を出ると花の香りに乗せたきれいな風が吹いてきて、ちり一つない道が日本へ着いたと教えてくれました。今回の訪日については長くなりすぎないように、深く印象に残ったことと感想をピックアップして書きます。

日本は美しい景色が多いので、通りに沿って写真を撮ればどれも観光写真のように見えます。日本はおいしいものが多く、何を食べても味蕾が刺激され脳まで届き、舌先に残る後味は幸せです。景色もグルメも楽しめましたが震撼するというほどではありませんでした。今回の日本旅行で震撼したと言えば一番は富岳会の見学です。何棟か建物が並ぶ眺めが美しいだけでなく、パンとお菓子が多少あつたぐらいでグルメというほどでもなかったのですが、人々の心が最も美しく最も暖かい施設だったのです。

理事長から紹介を聞いていたときは単なる日本の福祉施設で何もなさそうだと思っていました。ですが実際に見学して知的機能に障害のある人が健常者と同じように働いているのを実際に見たとき驚いてぼかんとしてしまいました。施設の人々は障害のある人を見下げることもなく見捨てることもなく、手取り足取りで望む生活のための努力を教えていたのです。

中国にもこうした知的機能に障害のある人はたくさんいます。日本より多いぐらいです。では中国でどうしているかと言うと、福祉施設や救援施設があつたとしても、彼らの生存に手を貸すだけです。生きる方法や自分らしく生きることについて教える取り組みはありません。生き方には尊敬もあるのですね。そこが日本との違いだろうと思います。私たちは無意識のうちに知的障害者は働きに出るべきではない、他人の助けを頼りに生きれば十分だろうと思ってしまうのです。今回この目で

彼らも働ける、パンもお菓子も焼けるということを見てきました。健常者と同じように意義ある暮らしを送っていました。午前中の見学で、差別も偏見もなく、無限の愛と根気だけがある天国を目にすることができたのです。

富岳会を後にしてから道中ずっと、この世界には先天的な障害者の存在することを考えていました。身体であれ知的機能であれ、今の私たちが十分に健全で完全でいられるのは彼らの存在があるからこそで、彼らが不完全なことと引き替えに私たちには普通の人の特権があるのでしょうか。そうだとすると彼らを差別する資格などないし、彼らにもっと愛を注がない理由もありません。彼らにとっての最低限は尊重です、ゆっくり自分の観念を変えましょう。

もちろんその後の旅程でも人と自然の調和したつきあい方にとっても震撼しました。今回の日本の旅は収穫がたくさんありましたが、一番重要なことは心を洗濯できたことです。日本科学協会の先生方、行き届いた世話をありがとうございました。周先生と胡先生の心からの教えにも感謝しています。今回の日本の旅では感動も成長も収穫できました。(原文中国語)

28. 中南財經政法大学 4年生 詹森凡

晩春のメモ・管見



【不二】

雲海の上を飛びました。はらかな空は紺碧で、広大な雲海が広がり、ぼんやりと童話や神話に出てくるかすかな雲間の空中の城を空想していました。

急に左側の人たちがざわめき、多くの人が富士山だと小さく声を上げました。

飛行機の窓からも冠雪した神聖な山頂はくっきりと分かりました。大自然の入神のわざ、完璧な創造物。日本人にとって古くから今に至るまでの信仰のシンボルであり、私たち来訪者にとってはさらに直接的な「日本へようこそ」という信号です。

それからの数日間、遠くから富士山を眺められました。富士百態という言葉に嘘はありませんでした。

特に御殿場に止まった次の日の朝、窓を開けて目にした朝日の下の富士山。

あらゆる美学の観察、哲学の論理、宗教の教戒も、カーテンを開いた瞬間に薄弱で無力なものに思えました。最も深いのは畏敬の思い、最も明らかなのは賛嘆ですが、結局とても言葉にしにくい感覚です。その瞬間あたかも肉体がちっぽけな虚無になったようで、見つめている間に魂が澄み渡り、心しなくなると自然と一体になれるような感じがしました。

そのときの宿泊先は時の栖(ときのすみか)という面白い名前のホテルでした。時間が本当にここで休めているようで、世俗の憂いをひととき忘れ、一瞬の中で永久に触れられたような気がしました。

私は不二山という古い呼び名が好きです。葛飾北斎先生の有名作品『富岳三十六景』に出てくる富士山のつく画題でもすべて「不二」となっていました。彼の浮世絵では、山の百態、人の百態が入り交じっており、高くそびえる霊峰も、人々が苦勞する姿も、愛すべきものがあります。

長い年月の下、天下無双なのです。

【歳月】

3つの博物館についての所感です。

伊豆近代文学博物館

川端康成は大阪出身ですが、『伊豆の踊り子』のまばゆさのあまり、伊豆の主役となっています。彼の手稿、あの小説に関わるさまざまな逸話、そしてたくさんの貴重な写真が陳列されていました。

実のところ、現代の目からは川端先生がかっこいいとは言えません。写真の彼はいつも陰しい表

情で、腰が低く、目を大きく見張っており、子供のようにきれいな目をしています。

たとえば初の映画版『伊豆の踊り子』の現場での写真では、坂道で膝を抱えて座っており、吉永小百合眺めていてぼんやりしています。その写真をそばで見ていた女の子が指さし「見てこれ、でれでれしちゃって」と笑っていました。

ノーベル賞の受賞風景もありました。会場の西洋人が笑顔で拍手を送る中、ゆったりとした黒い紋付きの羽織をまとった彼はわずかに腰をかがめて証書を大事に受け取り、落ち着いた表情をしています。その立派な姿には尊大さもありますがかっこよさもありました。

人は細かくていねいに生きるべきなのかとふと感じました。

江戸東京博物館

この博物館の内容について語り出したらきりがありません。教わったこと、面白かったディテールは山ほどあるのでいくら話しても飽きないと思います。

見て感心したのは、訪れていたたくさんの中学生が高校生が細かく観察しながら静かな声で話していたことで、解説員について歩く子、体験コーナーに熱中する子、静かに撮影しながらノートをとる子などもいました。

故宮、西安、湖北省博物館に長居したことはありますが、こうした様子を見聞きしたことがないのは私の見聞が狭いのでしょうか。博物館は本来これほどまで生き生きして、厳格さと重々しさも失わず、文化、芸術、歴史の足跡を巧みに構成した展示で少年たちの楽園になれるのですね。アルゼンチンの現代小説家ボルヘスは「天国は図書館のような姿のはずだ」と語っていますが、私は博物館だろうと思います。

中国人は儒学、法律、文学の伝統を重んじます。国力が付き経済が発展しているなか、いかに文化を継承し高めていくかという問題は多くの学者を悩ませ続けているテーマです。おおかた実のある答えはここにあると思います。

博物館を少年たちの楽園にできる国がどれほど強大なソフトパワーと民族の自信を持つかは疑う余地がありません。

立命館大学国際平和ミュージアム

その日は朝からくたくたの気分でした。前の夜に遅くまで京都で遊んでいたため睡眠不足なのと、そのあたりの歴史については受けてきた教育と自分の理解である意味もう知りすぎていると思っていたからです。

しかし解説員の竹林さんが小さな声で話すのを聞いていると次第に「目が覚め」、改めて歴史に近づき、恐ろしい写真を目にして、心の中にさまざまな波瀾が巻き起こりました。暗い面持ちのお年寄りが「むごたらしい、みっともない、そんなにすまないこと、ひどいやつら」といった言葉を何度も口に出しているのを聞くと、涙が出そうになりました。いわゆる民族感情の発露でそうなったのではなく、純粹に人間性の凶悪さに対する警戒心、戦争に対するののしりと憎悪です。

最後に案内された部屋は「無言館」と呼ばれており、戦争で命を失った人々の絵が飾られ、彼らの生い立ちと死について淡々と記されていました。

「乾かぬ絵具」と題した詩も壁に掛かっており、結びにこう書かれていました。

乾かぬ絵具

今も 少しも色褪せぬ

あなたの一滴の生命よ

涙がしたり落ちました。部屋の名前のように、そこでは何も言葉にならず、話す気も起きません

でした。

特にここを見学すべきだったのかもしれませんが。私たちは本当の「災難」に対する自覚がはるかに足りません。平和な時代をはるかに大切にしなければ。

【星の海】

前に星空を見たのはいつ頃だったのかしら。

思い出せません。

だいたい高校に入ったあたりから、武漢の空気の質が悪化し始めました。今やほとんど毎日スモッグに覆われています。都市部の夜空は若い人の夢よりずっと星がまばらで小さくしか見えません。憂うつで憤りを感じますがどうしようもありません。真夜中に窓を開くと、遠くも近くもあかあかと照明がついており、体裁上はますます賑わう大都市ですが、見上げたときに天使の輝く瞳は見えません。それもまた神の配慮なのでしょう。

伊豆の温泉で男子たちと打ち解けてよもやま話をしていたとき、疲れて石を枕に横たわりました。

天上を指さして「見てごらん」と声を上げてしまいました。

天の川が逆巻いていたのです。沈黙のひとときが流れました。はるかな時空を渡ってきたきらきらした記憶がすべて目の前に見えて投影され、入り乱れました。まるで無数の夢を詠んだ詩が蘇り、無数の真理を説いた警句がこだましているかのようでした。青春が永遠に続いて年老いることがないようでもあり、いわゆる青春はすべてこの天幕の中を跳ね回る精霊に捧げられるかのようでもありました。

「透き通った心と涙を流せる目、また信じられる勇気を持てるように祈りました。うそで包み込もうとすればするほど存在の意味が見いだせず、やみ夜の中を迷うたび、夜空で最も明るい星よ、近くへと導いてください。」

ぼんやりと変化する幸せがあり、郷愁とつらさもいくらかありました。

あの街は世界で最も多くの大学生を抱えながら人材がとどまらないと言われていています。百万もの学生が夜ごと見上げる空が漆黒のねっとりしたものだったら、心はどれほど冷えることでしょう。

青年たちに心とチャンスを与えるというならば、どうして私たちに暖かく深い星空をくれないのでしょうか。

白浜海岸

青い海。係留された船。自由な旋回するアホウドリ。きめ細くなめらかな砂は純粋な乳白色できらきらしていました。砂浜が単調になりすぎないようにとの神の思し召しか、ところどころ茨の茂みも見られます。若者が何人かサーフボードを抱えて海に向かうと、その筋肉が明媚な日差しの下で美しい戦を描きました。遠い波の音がかえってある種の神秘的な静けさを感じさせ、「セミの鳴く林は静か、鳥の鳴く山はかすか」と同じような奥深い趣でした。

すべてのロマンがそこに生まれそこで壊れていきました。

側には丘の低い崖があり、奇岩が重なり合っていて、波が岩にたたきつけるとしぶきが泡立ち、とても胸が揺さぶられるのです。崖の上には丹塗りの鳥居がありました。ガイドの星さんによると、良縁祈願ができるそうです。さわやかな海風は時に浅く吟じて時に低く吠え、また急に人の懐に飛び込むいたずらもしました。

かつての青海原は田畑に変わり、我々はカゲロウのようにさっぱりとした身なりで、戻る場所も探さずその岸辺にいと、あたかも朝に生まれ夕に亡くなるちっぽけさを知るかのようでした。ただそれぞれの執念は深く頑迷で、「道を聞かば死すとも可なり」と、敢えて長年追求し、海が涸れ石が砕けるまでの誓いを立てます。

たいていの人は抜き出して冷めた目で見れば愚かであり、振り返って熱い眼差しで見ればとくに

愛しいものでしょう。

前に会った級友は何年も努力し大学院を受けたときあまり理想的な成績ではありませんでした。詩を作って言ったことには、

夢を見て丘に廃墟を作り、物憂げな花にうつつを抜かし、
まだ染まるまいと念じながら、天の川の雲海で読書にふける
白浜海岸を離れてから、改めて彼女に「信」と「遠方」の話をしようかと思いました。

【今むかしの夢まぼろし】

東京では桜田通りに泊まりました。

隣は愛宕神社で、さらにその隣は曹洞宗の青龍寺でした。もう少し先には徳川六代将軍の菩提寺で浄土宗鎮西派大本山の増上寺があります。

東京に着いてすぐ十数人のメンバーで愛宕山を見に行きました。愛宕神社には八十段以上ある「出世の石段」を上らなければ行けません。登り切ったときはみんな息を切らしていましたが、ひっそりとした雑木林にろうそくの影が伸びるのを見かけ、心臓をすこし落ち着かせました。東京タワーから10分も歩かないような場所で高層ビルに囲まれているながら、神社の静寂さは灯りがきらめくビルは自然と違和感なく共存しており、もしくは絶妙に引き立て合っていると言うべきかもしれませんが、現代と古典がとけ合い調和した眺めでした。

安政の大獄、桜田門外の変は日本の近代史で避けて通れない事件です。明治維新前の暗流が激しく沸き立って、血生臭いあらしが吹き荒れ、風雲の変化が激しくなったのは、この事件が序幕でした。この時から腐敗していた幕府が崩壊に向かい、志士たちが苦勞して時代を切り開き、この島国に新たな時代の朝日を迎え入れたのです。司馬遼太郎の小説『幕末』に収録されている『桜田門外の変』では、「二百年來幕府で最も精鋭とみられてきた彦根藩の浪士十余人が一敗地に塗れたことは倒幕に進む人々を鼓舞し、明治維新の到来を早める力となった。ここから、この事件での死者はすべて、歴史が単なる犠牲とはしなかったことが分かる」とあります。

その日は雪のちらつく中、18名の勇士が愛宕山に集まり大老井伊直弼の刺殺を決行しました。そのため愛宕神社の鳥居の前には「桜田烈士愛宕山遺蹟碑」があり、裏に典故が刻まれています。第16代東京市長の大久保留次郎が1941年に立てたものです。

おまけ：愛宕神社の絵馬架けに大きな字で「日中友好」と書かれたものがあることに先輩が気づきました。愛知県の田峰さんが書いたものだそうで、小さな字で一行「一衣帯水の両国民の友情が深まりますように」とも書いてありました。これにはみんな本当に感無量で、いつまでも泣きじゃくってしまいました。

私は幼少から古典にふけていたほうだと思います。日本語には「古き良き」という言葉があります。中国では、ややもすれば遠く漢や唐に遡って話をしますが、それは誰もがあこがれを持つからです。日本人にとって中国のそうした歴史こそ「古き良き」ものでしょう。彼らが何を誇りにしていたのか見てみると、「国は中原国のように、人は上古の人。衣冠は唐の制度、儀礼や音楽は漢の君臣。銀の瓮には新しい酒、金の刃には錦の鱗。毎年2月と3月が桃李の咲く春」とあります。

今日を比べるとどうなるかは言いません。たとえば吉林大学の周先生から道中で聞いた話では、北京の友人の古い四合院が取り壊されてまた建て直されたそうで、苦笑のため息しか出てきません。

この数日に見た古跡、口にしたもの、目にした品々、行動やマナーはどれも周作人の書いたとおりでした。「私たちが日本にいる感覚は半分が異郷、半分が昔で、この昔が健全に異郷で生きている

ため、夢や幻のような空虚さではなく、高麗や安南の優孟の衣冠とも違うのです」。

いたずらに西を向いて正座し、心中を詩文に託したくなりました。

【流水落花】

河津桜

ソメイヨシノのような奔放さはないものの、ソメイヨシノが京都の十二単をまとったひ弱い少女だとすると、河津桜は伊豆の美しい山河の中でのびのびとしているように見えました。古代の浣溪あたりの婦人のように、薄化粧、健康的で、暖かく、早春を知らせてくれます。

その下には菜の花が敷き詰められ、水温が上がるのをいち早く知るといふカモが何羽かのんびり泳いでいました。日差しが山あいの窪地を越えて広がり、人は絵の中にいるようで、人そのものも絵のようでした。下校の早い女子生徒が桜の下で V サインをしながら何人かずつ写真を撮っていたのです。細かい花びらが風に乗って遠くまで飛び、水の流れに従って動き、土の上に散りほのかな香りを放っているものもありました。春が鼻の先に届いたのです。

気に入っている辛詞に、「風雨は花に替わり愁う。風雨がやみ、花も休むべき。花を惜しむ前に酔え、今年の花が散り、明くる年の花が散り、人の頭は白くなる。興に乗じて二三瓶。山溪のよいところを眺め歩く。酒を飲める体がうらやましい。花があってもよく、花がなくてもよく、非常に春秋を選ぶ」というものがあります。

昔はゆったりしていて、昔は良かった。日が長くなって、車、馬、メールがすべて遅くなり、一生で一人だけ好きになって。情報化時代の中で苦闘して、ますます速くなるテンポについていけないように感じる場合があります。世界の更新が早すぎるのです。だから花が必要なのだと思います。長い時間を費やしてゆっくりと花の悲喜こもごもを理解するのです。本当に一人の人を理解するのは難しいので、国を本当に理解するとなると言うまでもありません。しかし花に寄せる共感、ピンクの花とほのかな香りに凝縮された愛しさは、我がことのように感じられます。

「夢の中の青い山が変わらないうちに、彼女は花が落ちる前に来る」。

滋賀県高島市針江地区

当地の人々は独特な水文化を育んできました。冬は暖かく夏は冷たい地下水の「生水」を汲んでそのまま飲むことができ、清冽で甘さがあります。水路には私たちより年のいった鯉の群れが泳いでいました。住民が「川端」と呼ぶ用水池では、天からの恵みが慎重に利用されています。集落を小川が貫いており「泥地ではジュンサイがつつやと水底で揺らぐ」柔らかなこの波の中では確かに「一本の水草に甘んじている」感じがしました。

当地は 12 年間まったく政府の交付金を受けておらず、すべて地区のお年寄りたちが自発的に組織する委員会が心を込め管理し守ってきたそうです。解説してくれたお年寄りは言葉の端々に自然への敬意と集落に対する誇りをにじませていました。彼らは若い血が足りない(大都市にあこがれてしまう)ことも、前進には困難があるという事実も認めています、^{きくきゅうじんりよく}「鞠躬尽力、死して後已まん^や(力を尽くし、死ぬまでやめない)」姿勢が強く、とても感動しました。

中国でも早くから「子孫の代に肥沃な耕地と青い水、空を残す」という理念が掲げられてきましたが、どういう事態まで実践が進んだことでしょうか。食料が足りてから礼節を知ると言いますが、目を覚ます日はまだ遠いのでしょうか。針江の人々の心配していることが中国でも起きているのでなおさらです。私たちの世代は「少子高齢」社会を迎えざるを得ません。日本のストレスフルな職場を参考に、日本の「経験豊富な」社会福祉制度と比較して、中国は自らの国に適した、発展方向の転換(持続可能、環境に優しい、付加価値が高いなど)と労働力、社会の圧力(若者)と福祉(幼児、高齢者)とのバランスを探ることが避けて通れないのです。

【盛大な宴の後の涙】

全国各地の日本語専攻のエリートたちと集うこうした機会は一生涯のうちでも得がたいものだと思います。短い時間だったとは言え、この上なく素晴らしいものでした。

特に何人かの「ちょうど育ち盛りの同級生」男子とはよく飲んで人生について「一流になるには若いうちから志を持たないと」など語り、「初心を忘れず共に努力しよう」と誓い合いました。

もちろんこうした機会をくださった日本科学協会と日本財団には心からの敬意と感謝を述べなければなりません。この気持ちは 1 日目に大小の余すところなく書き込まれた日程表をもらってからずっとあります。

吉林大学の周先生、胡先生、日本側の顧先生、吉田さん、宮内さん、石倉さん、中村さん……優れた人生の先輩方のはっきりと胸を打つエピソードをひとつひとつお話ししたい気分です。

自分は「取るに足らない一介の書生。登用される道もなく、筆を投げたい気持ちもある」といったところですが、初めて日本の地を踏んだ大学 3 年生です。道中では先生方やメンバーみんなにとてもお世話になり、多くのことを学ばせてもらえました。感謝を大事にしていますが、言葉では表しがたく、大げさに言うと社交辞令のようになってしまいます。最後に一人一人に心からお辞儀して、「ありがとう」を言うたび力を込め、「またね」に誠意を込めるのがやっとでした。

心に猛虎あり 細かく薔薇を嗅ぐ盛大な宴の後 涙はこぼれる
空の果て海の果てから君の無事を祈る 遠くから風が吹けばいつか会える縁もあろう

ついにこの世界ともお別れですが、この世界への思いは邪魔されません。
ここでお別れしても、初めて会ったときの飴のように甘い思いは邪魔されません。

29 安徽師範大学 外国語学部日本語学科 3 年生 張明睿



この度、日本に見学に来た機会をくださりまして、ほんとうにありがとうございました。

昨年、日本に1ヶ月に滞在したことがあるが、今回の体験がもっと印象深く、いろいろなことを感じさせたと思う。

日本に来る前に皆さんに届いたメールの中、皆さんが興味を持っている話題の調査以外、アレルギーがあるかどうかという質問でもある。当時、日本人が思いやりだなと考えられた。今年3月1日、日本に着いて、ホテルへ行く途中で、日本の先生たちは皆さんに自由活動の日の昼食料として5000円をくれた。当時、すごく驚いた。それに、先生たちは日本では直接に他人にお金をくれるのが非常に失礼なことで謝った。その時、日本人の用意周到な精神に感心した。それから、その場合に面するとき、自分でどうすればいいということも明らかになった。

3月5日、**針江**生水の郷という小さい村に行った。そこか琵琶湖の上流にあつて、きれいな村だ。そこの人々は水道水を使わなく、直接に生水で料理を作ったり、洗いをしたりしている。私たちが来た時、親切な針江の人々は美味しい魚料理と豆腐を作ってくれて、生水を味わわせた。針江の人々が言った言葉も深い印象を残った。この水は自然の恵みだよ。私たちはこの水でお金を貯まらなく、ご自由に取りに来てください！それに対して、私の故郷にある川が工業の発展のため、今汚れていて、都市に住んでいる人々誰でも水道水を使っているのだ。中国の大部分都市もそうだ。中国の皆さんも針江の人々のように、水は自然の恵みだと思えば、環境がきっと綺麗になるでしょう。

私たちも富岳会という福祉施設に見学に行った。私ははじめてこのような施設に行った。中国でも、日本でも、障害者たちはここで治療を受けるだけでなく、勉強したり、仕事をしたりしている【もちろん、

これが有料だ]。その中、私を感動させるのは、日本人の障害人に対する態度だ。ここで、障害人たちが人間としてだけでなく、この社会の一部と認められ、自分の社会の価値を実現させるのだ。

それ以上の感想以外、この豊かな旅で偉い先生たちと各地から来た優れた学生たちと出会った。本当によかったと思う。

最後、皆様に心より本当にありがとうございました！（原文日本語）

30. 安徽師範大学外国語学部日本語学科 4年生陳玉

「ごちそうさまでした」



(中国語で申し訳ございませんでした、作文を短時間で完成するにはやっぱり母語でもっと上手になれ、自分の感情も素直に表現できると思うので、ご迷惑をおかけして申し訳ありません)

3月11日は日本から帰国して3日目ですが、東日本大震災から5周年でもあります。震災復興がもう5年になり、放射性物質の漏れなど軽視できない問題がまだあるものの、今ほど日本に確信を持ったことはありません。

「人事を尽くして天命を待つ」という言葉は日本知識クイズ大会に参加する前いつも自分を励ましチームメイトを慰めてくれていましたが、失敗が怖く自信のない私たちにとっては奮闘を続けるための精神安定剤でした。94 大学による過酷な競争を経てついに決勝へ進み、何度も逆転するという奇跡を作り出し、思ってもみなかった日本へ行く機会を獲得できたことはこの20年で最大の幸運です。

3月1日、チームは上海に集合し、全日空機で成田空港に向かいました。日本上空で分厚い雲の向こうに傲然とそびえ立つ富士山の潔白な姿を見ると、日本が近づいているのだと分かりました。早くから空港で待っていてくれた日本科学協会のスタッフが出迎え、まるまる8日間ずっと随行してくれました。旅行した場所は東京、静岡、滋賀、京都、大阪で、東北地方には行きませんでした。暖かな春の日射しの中で万物の蘇る空気が日本全体に満ちていました。日程全体が豪華なフルコースのようで、身も心もその途中にあるようでした。東京タワーの温かなオレンジ色の光、静岡で空の際までピンクに染めた河津桜、心の底まで染み渡る針江の生水は忘れられません。ホテルで目覚めて窓を開くたび富士山や琵琶湖が広がり、驚きと喜びに頭が目覚めてその日の夢の旅を始めることができました。

最も印象に残り深く感動したのは、富士山の麓にある富岳会の福祉施設です。どうすれば本当に障害者を助けられるのか、そこで日本が答えを教えてくださいました。働いてもらえば、彼らは普通の人として、ひいてはそれより優秀に人生を送ることができます。中国では十分な補助を与えて寿命まで養うのが一番だと考えられていますが、同施設では自分の手で仕事をして趣味を伸ばすことができ、自分の人生の価値を実現することができます。健常者が障害者を助けるのではなく、障害者が私たちに生きる力をくれるのだと本当に感じました。知的機能に障害のある人が演奏する太鼓を鑑賞したとき、生命の張力、粘り強さがわっと押し寄せてきて震撼しました。いつの間にか涙があふれ出ていました。

実際「人事を尽くして天命を待つ」では不十分で、「人事を尽くして天命を受けさらに奮闘する」べきなのだと思います。運命で決まってしまうこともあるかもしれませんが、そのことに負けることはありません。たとえ打たれて腹ばいになったとしても、自分を信じ願いを持ちさえすれば、また這い

上がることはできます。東日本大震災から5年、復興は間近です。

今回の普通ではない日本旅行が日本を寄り深いレベルで理解するための橋を架けてくれたことに感謝し、中日友好を願って手を取り共に歩みましょう。(原文中国語)

31、安徽師範大学外国語学部日本語学科4年生 王兆琪

「特殊な」日本の旅



2015年11月15～16日、2人のチームメイトと吉林大学での「笹川杯全国大学日本知識大会」に参加しました。最終的に団体戦で2位に入り、日本を訪ねるという貴重な機会を獲得したのです。

2015年11月16日に大会が終わってから、日本側の顧文君先生、吉田玉果さんが何度もメールで訪日する学生ひとりひとりのリクエスト、興味のある見学場所、パスポートとビザの手続き情報などを問い合わせしてくれました。何事も手抜きなく周到で、事の大小に関わりなく、食物アレルギーがあるかどうかさえ詳しく聞いてくれたのです。すばやく細かい仕事ぶりには本当に敬服します。

そしてついに、期待し待ち焦がれていた出発の日です。2月29日の午前、荷物をまとめて興奮しながら上海行き的高速鉄道に乗りました。しかし不幸にも母が事故に遭い、この旅を諦めて帰宅しなければならなくなってしまったのです。

青天の霹靂のような事態に焦って、どうしたらよいか分かりませんでした。その後、吉林大学の胡建軍先生のお力添えで、やっと日本側と連絡がとれました。約束を守れないことを攻める人はいませんでした。胡先生は何度も電話をくださって、気をつけて、落ち着いて、と帰宅途中の私に言い聞かせてくださいました。

その後、病院で母を見舞いましたが、訪日団の微信グループを見る気にはなれませんでした。まるで日本への旅がとげに変わり、見るたび目を刺すような痛みを感じました。

しかし3月10日、思いがけない速達が届いたのです。開けてみると、ぱんぱんになった書類フォルダ1冊、清水寺のお守り2つ、魔法瓶1本、和菓子1箱が目に入りました。日本科学協会とメンバーたちがくれたプレゼントだったのです。メンバーの話によると、見学地に着くたび吉田玉果さんが観光案内冊子をフォルダに入れてくれていたとのことでした。清水寺では私と母のために開運のお守りと健康のお守りをいただいでくれて、毎日のように私の様子をメンバーに尋ねてくれていたそうです。当初3月生まれである私の誕生日の用意もしていたのだとか。

面識もない日本側の先生方が気にかけてくださっていたことに言葉も出ず、ただただ感動しました。長いこと期待していた東京での対面はかないませんでした。これだけ遠くにながら、はっきりと先生方の温かみを感じ取れました。こういうとき言葉はいつも無力です。心の中の感激があふれてきました。

私にできることは、この感動をしっかり覚えておくことだけでなく、こうした人や事物への向き合い方を思い直し学ぶことです。

2つの国の人が出会えば、どれほど平凡であっても、お互いがそれぞれの国全体の代表になってしまいます。個人の言動の一つ一つに祖国の烙印が押されるのです。すばらしさを見てもらうには表面的な努力では足りません。誠実に人と向き合う心がないと、その友好を理解してもらえないでしょう。

今回は神様のいたずらで日本を実際に感じる機会を失いましたが、収穫はそれでもたくさんありました。和やかに親しみやすく接してくださった胡建軍先生、真剣で入念な顧文君先生と吉田玉果さんにこの場で感謝したいと思います。皆さんは別のすばらしさを見せてくださいました。

1冊1冊の観光案内冊子を細かく読んでみると、みんなと一緒に伊豆の白浜海岸をそぞろ歩き桜吹雪を愛でて、衆議院や江戸東京博物館で歴史の断片を感じ取れたような気がします。美しい琵琶湖、にぎわう大阪の街、そして愛すべき日本の人々。

本当に特殊な「日本の旅」でした。(原文中国語)

★「笹川杯作文コンクール」訪日団

人民中国雑誌社 総編集長助理 薛 建華 (中国語原文)



気づき感じた日本のあれこれ

言わば春の遠足に訪れた初春3月の東京では桜はまだでした。新橋の愛宕山にあるホテルのロビーは春の息吹が満ちて生氣にあふれていました。「笹川杯全国大学日本知識大会2015」個人・団体入賞者と「笹川杯作文コンクール」受賞者の訪日団のため、歓迎会が催されたのです。日本科学協会の大島美恵子会長が自ら出席され歓迎の挨拶をくださいました。

各大会の受賞者が日本の遊覧を堪能

3月1日に訪日団の一行33人が東京を訪れ、8日間の旅が始まりました。東京から大阪へ、伊豆半島、富士山のふもと、琵琶湖畔を經由して……。

「笹川杯全国大学日本知識大会」は、日本財団の賛助のもと日本科学協会が中国の大学と共催している、中国青年に日本への理解を深めさせ、日本語学習意欲を起こし、両国の文化交流を促すことを目的としたイベントです。2004年から一部地区の大学で地域的に「日本知識大会」が行われはじめ、2011年から全国規模で展開されています。本年度は吉林大学で行われ、全国の94大学から400数名の団体戦、個人戦の参加選手と指導教員が集まりました。参加人数と大会規模は大会史上最高を記録しています。

他にも、日本財団と日本科学協会が中国青年報社、人民中国雑誌社と共催する中国青年のための「作文コンクール—感知日本」と「Panda杯全日本青年作文コンクール」があり、前者には多くの中国の大学生が参加しています。前者は2015年で第8回となり、これまでに約1万人が作品を寄せました。関係する機関は大学を含め200を超え、本年度は全国117大学と企業など17の機関から1416作が集まっています。

もっとたくさんの方々の新発見のために

2日、訪日団は美しい伊豆半島を訪れ、近代文学博物館を見学して、川端康成、井上靖、葛飾北斎といった文学や芸術の大家が伊豆半島に刻んだ足跡をたどりました。伊豆は多くの日本文学愛好者が心からあこがれる場所で、あこがれを抱きながら当地の風景を眺め、文化の息づかいを感じ取っていました。

学生達は山あいの小道をそぞろ歩いて、川端康成の『伊豆の踊り子』に描かれた場所で踊り子と学生の彫像に足を止め、目の前の情景に感慨が湧いた様子で、和服を着て下駄を履いた踊り子が学生を追いかけていく書中の情景を想像しては話し合っていました。

4日、一行は静岡県富士山のふもとで社会福祉機関の富岳会を見学して、身体障害者、高齢者、子供への思いやりを感じ取りました。

学生たちに特に新鮮だったのは高島市の「びわ湖源流の郷」でした。当地は豊かな地下水に恵まれ、住民は 2000 年以上まえから「水と共生する」暮らしを送ってきました。水系全体の清潔さを保つための水の使い方にはとても教えられるものがありました。

琵琶湖畔では他に長浜市と高島市を訪れ、長浜市で梅花展と曳山博物館の見学もしました。曳山は日本文化教育映像に出てくる内容ですが、実物にお目にかかるのは初めてです。ボランティアの馬場さんに解説してもらって新しく得られた知識もたくさんありました。

定番観光スポット案内では紹介されていないところばかりです。この毎年一回の招待旅行で学生がそれぞれ違う日本を見られるように日本科学協会は知恵を絞ってくれているのだと言えます。今年のテーマは「日本新発見」で、東京、大阪、京都といった日本を代表する大都市と文化の都を見学するだけでなく、文化、歴史、環境保護、社会福祉などに関連する内容もあり、中国の若者により多くの角度から日本社会を知ってもらおうという努力がなされていました。

吉林大学の貢献

日本知識大会が成功していなければこの充実した訪日旅行もありませんでした。吉林大学が中国側主催者として今回の知識大会のために十分な準備をしてくれたからこそ、何ら失敗なく大会が行われたのです。

吉林大学日本語学科は 1950 年代から日本語教育課程を開いている著名な日本語専攻の老舗です。今の外国語学院の若き院長、周異夫教授が重任を担って、全国の日本語教育発展のために新しく貢献するという精神に基づいて大会の成功のために多くの苦労を重ね、誇るべき実績を上げました。

周院長が全面的かつ綿密な計画を練り、退職した日本語教員と大学の関係する責任者を含めた学部全体でさまざまな準備作業に取り組みました。大会の 1 次予選、2 次予選、決勝戦の出題関連という大きな仕事だけでなく、通知、グループ編成、受付、交通、滞在など、ことの大小に関わりなくすべて手配しなければならず、寝る間もなく働かれた日がどれほどあったことでしょう。

追加出題が要る可能性を考慮に入れて最終的に 3000 問を超えるテーマを選定し、大会の権威と厳格さのため正解が 1 つだけになるものを一つ一つ厳しくふるい分けて、ネットを検索して見つかった過去の出題テーマと重複がないことを確認できたもののみ採用しました。盛りだくさんの問題を確定して PPT ファイルを作成する作業量は想像がつかます。しかもこれほど多くの仕事を秘密裏に行うのですから、その難しさも相当なものでしょう。しかも自分の学生も参加選手なのです。周院長が真っ先に学生に対して説いたのは、今回の大会には出題範囲も指導教員もないので自分の努力に頼るほかないということでした。

知識大会を通じて、日本の理解、自主的な学習、知識を増やす積極性に学生達を奮い立たせただけでなく、大会は全国大学の交流するプラットフォーム、日本語教育の成果を示す競技の場ともなりました。

平和と向き合う思索

8 日間の日本の旅で各人の心には異なる日本の印象が残りました。清潔な大通り、整然とした人の群れ、気持ちをよく分かってくれる店員、拾った財布を届けに高速道路を飛ばしてくれたホテルの人……

京都では同志社大学の学生ボランティア 10 名が交流しながらガイドを務めてくれました。別れの時の真剣な言葉はとても心に残っています。

「笹川杯作文コンクール」で優勝した安徽合肥学院の奚相昀さんは去年たまたま北京で服部真理子さんと知り合いましたが、今回の旅程でその縁がより忘れられない友情へと発展しました。7 日に

真理子さんが広島から大阪に駆けつけ、2人は大阪の観光スポットを巡ったあと別れを惜しました。

両国の若い世代の友好的関係は本当に貴重で、見ていて安心します。両国関係に話が及ぶと、戦争の歴史は避けて通れない話題です。京都にある立命館大学の国際平和ミュージアムの入口で、周異夫団長がボランティア解説員の布川庸子さんと偶然に出会い、2人は再会の喜びに感無量の様子でした。

周団長は19年前に全国青年代表団の一人として同館を訪れたことがあり、布川さんの印象に深く残っていました。その彼が教授として学生たちを連れて再訪したのは、戦争を忘れず平和を守る歴史教育を受けるためです。

布川さんは元教員で、長年ミュージアムの解説をしてきました。また館内の展示品の説明を冊子にまとめる作業に心血を注いでおり、『ミュージアム「物」語』と名付けています。館内には彼女と同年配のボランティアもたくさんいました。

ミュージアムで戦争の歴史に向き合い、年輩の人の意味深長な言葉を聞きながら、長い間回想して深く考えてしまいました。歴史の振り返りだけでなく、若い世代に対する願いも、そして戦争のない世界のために、すべての命が開ける調和した社会を築くために、今の私たちは何をすべきなのか……。 (原文中国語)

南京郵電大学日本語科 3年生 王 喆琦



旅に出る

途切れることなく続いている青い海岸線が飛行機の窓から見えたとたん、「あ、とうとうこの地にやって来たんだ！」と数日前から心を掻き乱していた動揺が一瞬に高まり、下唇を噛んでも手で覆っても隠しきれない微笑みが口元に浮かびました。

初めての日本、初めての海外旅行。

見るものが全て新鮮に映り、いろいろなことが勉強になりました。

実は今日本語の家庭教師として教えている人が一人います。面白いことに、彼女はプライベートでも、仕事上でも何十回も日本に行っていますが、日本語が全然できません。その反対に、日本語ができる私が一度も日本に行ったことがありません。「日本では日本語ができなくても全く差し支えがない」と言われた時、そのことは日本語を専門として必死に勉強してきた私には信じがたいことでしたが、日本に来てみて初めて、彼女の言ったことがよくわかりました。

レジのところでは三人のうち二人が中国人、店員も中国人がほとんどでした。金閣寺でも中国語を口にしたらすぐに中国語で日本人が話してくれます。違和感を覚えたりする一方、言語は一種の道具に過ぎないことに気づきました。私が勉強しているものの価値の大きさはこれを使って何に使おうということで決められるわけです。商売に使うと、売り上げを伸ばすことにつながります。教育に携わると、人の将来に影響を与えます。文化の交流に用いると、互いに分かり合えます。

異なる言語のニュアンスが分かるに従って、使い道も広くなります。

生水の郷というところでボランティアに案内していただいて、日本にこんな生命の輝きに満ちた完璧な水循環の施設が建てられている集落があること、そしてエコに一生を捧げている人々に感心させられました。上流の人は下流の住民のことを心に掛け、水を汚さず、そして下流の人がまた感謝の気持ちを込めて丁寧に水を使います。既に建てられている施設よりも、このような心の底に潜んでいる理念と発想が後世に引き継がれたらいいなあと考えています。

ボランティアの話によると、日本全国はもちろんのこと、海外からもたくさんの方が見学に来ていま

す。アメリカなどでの環境大会にも招かれ講演したといえます。しかし、地元の環境会のメンバーは定年となったお年寄りが多いため、かろうじて英語のpptを作り、発音も不慣れのため写真でなんとか理念を伝えました。身近に英語あるいは日本語が通じる人がいれば、胸の奥の感情をありのまま伝えられ、もっと聞き手の心に響くことでしょう。私たちも日本語ができるおかげでそれぞれの思いを理解できて、更に、案内してくれたボランティアの大阪弁にも親しみを感じられ、より一層心を近寄せられました。

また、帰る時隣に座っていたのは来る時と同じ人でしたが、この短い旅でお互いに似た者同士日本語をどれほど愛しているか、日本文化にどれほど興味を持っているかを日本語混じりの中国語で語り合い、心を通じ合わせることができました。

言葉って本当にミステリアスで、ワクワクするような部分があります。

それに、私はやっぱり「言葉」が好きなんだなと思いました。

「どこでもいいから、いま、一番行きたいところはどこですか」と質問を投げかけられたら、いつも即座に「日本です」と答えていたこの私には、八日間などあっという間に過ぎてしまうから自ら積極的に前に出ないと、攻めに攻め続けないと、何となくこの時間を無駄に過ごしてしまう気がしていましたが、実際にそこに自分の身を置いたらそのまま周りの雰囲気流され、その場ならではの出会いを気軽に、大切に味わえば十分だと思うようになりました。

この八日間、きっと一生の思い出になるでしょう。

一度夢見たところへ旅に出てみよう。文字で書かれた平面のものを立体的にしていくうちに自分で新しいものを発見することができます。それが楽しいことになるのか、抱いたイメージとはまっ逆になり、がっかりすることになるのか分からないですが、そういう自分が憧れてきたものを身を持って体験すれば、自分なりの受け止め方で見分ける判断の目も養われていくことでしょう。(日本語原文)

合肥学院日本語学科 3年生 奚 相昀

日本の旅

1.山のあちらに



中学で習った詩に『山のあちらに』というものがあります。

「小さい頃いつも窓辺にもたれて妄想していたこと

山のあちらには何があるかしら

母は海だと教えてくれた

ああ、山のあちらには海があるの」

小さいときから黄山で生活してきたので、高く険しい山は見てきましたが、海には独特なあこがれがあります。今回の旅では島国を訪ねたので初めて大海を目にしました。まるで真っ青な空とつながっているような果てしない海。白い波しぶきが海岸を打つと、鼓動も同じリズムで脈打ち、夢の歌が書けそうでした。感情を抑えきれなくなって竹の棒を取り、柔らかな砂浜に書いたのは、ずっと胸を離れない言葉でした——今ここにない未来は自分で作る。お前ならできる。

「山のあちらには海があるの？

そう！

信じてください——

とどまることなくいくつもの山を渡り歩いた後

たびたびの戦いで失望した後
山頂にやっとのことでたどり着くのです
その山のあちらは海なのです
まったく新しい世界なのです
その瞬間にその目を輝かす……」

2. 一輪の花が世界を語る

まさか 3 月に満開の桜を味わえるとはとても幸運でした。早咲きの河津桜に出会えたのです。さらさらと流れる水の上をピンクの枝々が飾り、木の下では三者三様の物語が展開されていました。下校中の小学生はカメラに一番きれいな瞬間を収めているのか、並んで歩くカップルはすてきな未来でも描いているのでしょうか。笑顔いっぱいの親子 3 人は晩ご飯の話でもしているのかしら。独り木の下に座ったお年寄り歩いてきた人生でも思っているのかも……一輪の花が世界を語ると言いますが、毎年こうして咲き誇る桜達はいろいろなライフステージを見届けていました。桜の見頃のようにそれぞれのライフステージははかないものです。それぞれの時期にがんばって花を咲かせないと——桜のようにきらびやかに。

3. 魂に響く太鼓

公演を鑑賞して感涙にむせぶとは思いませんでしたが、「富岳会」の太鼓を聴いて体験しました。力強く高らかな太鼓の音は一回ごとに心臓の上で打たれたようで、しかも胸腔が共鳴しだすように感じたのです。この感覚は文字で表現できない感動です。その中に身を置かないと魂に響く力を味わうことはできません。そして聴かせてくれたのは特殊な人々でした。生活する上での不自由があるようですが、私が目にしたのは演奏中の努力と自信、そして終了後に見せた光り輝く笑顔だけです。もしかすると「富岳会」という特殊な社会福祉機関にいれば自分が気に入るしかも有意義なことを見つけられるのかもしれませんが。特別扱いを必要とせず、努力と引き替えに拍手を受ける権利を手に入れたのです。そこでは同じような多くの人が就業訓練の支援を通して安定した生活を送っていました。彼らが幸せだと断言はできませんが、真剣に仕事するその姿勢からは積極的で向上心のある生活態度が感じられました。ここから窺える日本の進んだ福祉事業も学び考える価値があるものだと思います。

4. 自然との共存

「土地は広々と、家屋は整然と」——まるで陶淵明の詠んだ桃源郷を違うアプローチで作り上げたようだ、というのが源流の郷に対する印象です。

川端とは美しい名前を持つすばらしい施設でした。

その厨房、冷蔵庫、養魚池、井戸という多くの役割は、大自然の恵みによるものです。神聖でエコなその存在は人類と大自然の平和な共存を見せてくれました。100年前の水源が絶えることなく村落の人々をはぐくみ、人々も自分たちの力でこの浄土を守っています。そこでは利益もお金も目に入りません。目に入るのはシンプルで落ち着いた暮らしと、人々が郷里を守る決意だけです。

5. 過去から未来へ

立命館大学の国際平和ミュージアムは、ロビーでひととき目を引く壁画が出迎えてくれます。手塚治虫大先生の「火の鳥」です。一羽は過去を表し、一羽は未来を表しています。過去から未来へ、戦

争から平和へ。平和な時代に暮らす私たちはもちろん歴史を忘れることはできませんが、今の生活を大切にして、もっと平和な未来を追求するべきだと思います。

6. ありがとうを伝えたい皆さん

今回の日本旅行ではたくさんのすばらしい思い出と感動が心に残りました。

ずっと随行して面倒を見てくださった日本科学協会の先生お3方

引率して下さった先生お3方

同行した30人以上の仲間達

深く広い知識をお持ちのガイド、多恵さん

中国好きなバス運転手さん

伊豆のいちご園のおばあさん

周恩来総理を尊敬する黒沢さん

かくしゃくとしたボランティアの馬場さん

親切で明るい日本の学生の皆さん

笑顔で迎えてくれた店員さん達

そして会いに駆けつけてくれた中川先生と真理子さん

.....

この夢のような日本の旅をありがとうございました。(原文中国語)